

日本中東学会ニュースレター

JAMES
NEWSLETTER



No. 174
2024/10/07

目次

会長所感.....	2
理事会報告	4
2024 年度日本中東学会第 40 回年次大会総会議事録.....	7
お詫びと訂正：年次総会資料の 2024 年度予算表について	17
日本中東学会第 40 回年次大会報告.....	19
アジア中東学会連合（AFMA）第 15 回大会のお知らせ.....	39
『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告	48
寄贈図書.....	49
会員の異動	50
連絡先をご存じないですか	51
事務局より	52

会長所感

ガザ戦争から1年

保坂修司

2023年10月7日、ガザを拠点とするハマスなどパレスチナ武装組織が突然、イスラエルに侵入、民間人を含む1,000人以上のイスラエル人や外国籍の人びとを殺害し、約250人の人質を取るという事件が発生しました。イスラエルはその直後から反撃を開始し、今年8月半ばにはガザ地区でのパレスチナ人の犠牲者だけで4万人を超え、その数は今も増えつづけています。痛ましいことに、犠牲者の多くは、子どもや女性、老人たちなどです。攻撃によって多くのパレスチナ人が家を追われ、さらにイスラエル軍のガザ封鎖で医薬品や食料など支援物資が滞り、飢餓や伝染病の蔓延が危惧され、ガザは最悪の人道危機を迎えているともいわれています。

事件から1年が経過、世界中から停戦を求める声が上がりながら、武力衝突がガザからヨルダン川西岸、レバノン、シリア、イエメン、そしてイランにまで拡大するなど、事態はますます悪化しています。10月1日にはイスラエル軍が、限定的ではありますが、地上軍をレバノン南部に侵攻させ、中東の広範囲を巻き込む全面戦争の可能性も懸念されています。

事態が鎮静化する兆しがまったくみえないなか、今、国際社会の役割があらためて問われています。現在、米国とエジプト、カタルがハマースとイスラエルの停戦の仲介を行っていますが、イスラエル・ハマースともに妥協の姿勢が見られず、進展は窺えません。頼みの綱の国連、とくに安全保障理事会は、国際社会の分断を背景に、ほとんど機能しなくなっています。イスラエルに影響をおよぼせる唯一の国である米国は、大統領選のため当面、身動きがとれそうにありません。

一方、中東やイスラーム諸国では、各地で反イスラエルのデモが発生しており、当事者であるイスラエルにおいても、戦争をつづけるネタニヤフ首相を非難する声が高まっています。イスラエル支持の立場を堅持する欧米諸国でも、大学などで停戦を求めるパレスチナ支持の動きが活発化しました。北米中東学会、英国中東学会なども、ハマースの攻撃直後から停戦を求める、イスラエルに批判的な声明を出しています。また、一部の大学では当局が力づくで学生のデモを排除し、多くの学生を逮捕する事件が起きています。この問題を契機に、米コロンビア大学では、警察の学内への入構を許可した学長が辞任する騒ぎにまで発展しました。パレスチナ支持の声が高まるなか、他方では反ユダヤ主義の拡大を懸念するイスラエル支持の動きも活発化しています。ガザでの戦争はすでに「学」の独立をも侵食はじめています。

日本でも私たち日本中東学会だけでなく、日本オリエント学会、そして日本イスラム協会といった日本の中東研究をリードする学会が昨年、あいついで停戦を求める声明を発出

しました。また、複数の大学でパレスチナ支持、あるいはイスラエル支持の集会が行われ、研究者やNGOを主体とする講演会や研究会も各地で開かれています。たとえば、日本中東学会で最近、開催の案内がされたものだけでも以下のようなものがあります。

- ・現代中東研究コロキウム特別シンポジウム「第 X 次中東戦争はなぜ続くのか？：イスラエルとハマースの戦闘開始から 1 年」現代中東政治研究ネットワーク (CMEPS-J)・立命館大学中東・イスラーム研究センター (CMEIS) 主催、2024 年 10 月 6 日開催
- ・中東情勢オンライン講演会 (鈴木恵美・中央大学文学部教授「エジプトにとってのガザ戦争」公益財団法人中東調査会主催、10 月 11 日開催
- ・緊急オンラインワークショップ「中東戦争の新展開：ガザからレバノン、イランへ (?)」科学研究費補助金基盤 A「空間・暴力・共振性から見た中東の路上抗議運動とネーション再考:アジア、米との比較」・科研費学術変革(A)「イスラーム信頼学」総括班主催、2024 年 10 月 15 日開催
- ・公開講演会「イスラエル宗教右派・宗教シオニズムの系譜と現在」グローバル地中海地域研究プロジェクト同志社大学拠点主催、2024 年 10 月 19 日開催

中東でこれ以上の犠牲者を出さないためにも、一刻も早く停戦を実現し、パレスチナとイスラエル間での「二国家解決」に向けた道筋を作ることが重要でしょう。しかし、残念ながら、インターネット上にはともすれば「ヘイト」とも映る過激な言説が満ち溢れており、イスラエルやハマースの頑なな姿勢を後押ししているようにも見えます。こうしたヘイトを放置しておいては、たとえ停戦を実現できたとしても、それを恒久的な和平へと変えていくことは難しいでしょう。

そうした意味でも、私たち中東研究者の役割はこれまで以上に大きくなっています。日本中東学会会員の皆さまには、中東という地域に関わる研究者として、その専門性を活かしながら、さまざまな機会を用いて、主体的に中東に関する正しい情報を発信し、人びとの中東理解を深化させ、その裾野を広げていただきたいと思います。中東に平和をもたらすという目標に向けては、この方法は地味であり、また遠回りで時間もかかりますが、とりわけ中東から遠く離れ、一般に理解の浅い日本においては必要不可欠なことであらうと信じています。

理事会報告

【2024 年度第 1 回理事会】

日時：2024 年 4 月 29 日（月・祝）18:30～22:00

出席者（五十音順・敬称略）

秋葉淳、五十嵐大介、岩崎えり奈、大川真由子、大塚修、小澤一郎、菊地達也、
熊倉和歌子、後藤絵美、佐藤健太郎、錦田愛子、福田義昭、保坂修司、堀抜功二、
嶺崎寛子、森本一夫、山口昭彦

欠席者

なし

〔報告事項〕

1. AJAMES 編集について報告と説明があった
2. 「日本における中東研究文献データベース」の改修について報告があった
3. 第 40 回年次大会の進捗状況について報告があった
4. 日本中東学会年次総会の準備状況について報告があった
5. 2024 年度 AFMA 大会開催準備の進捗状況について報告があった
6. 第 30 回公開講演会の進捗状況について報告があった
7. 第 41 回年次大会の進捗状況について報告があった
8. 過年度の科研費監査の結果について報告があった

〔審議事項〕

1. 2024 年度事業報告案・2023 年度決済案について審議した
2. 2024 年度事業計画案・2024 年度予算案について審議した
3. AJAMES 編集体制について審議と承認を行った
4. 2024 年度の国際交流事業として AFMA 大会の予算案を承認した
5. 研究倫理・ハラスメント関連の会則を制定することについて審議した
6. 退職者の会費特例申請について審議した
7. 学会のゆうちょ口座の住所・代表者変更について審議した
8. 学会のノベルティグッズについて審議した
9. 会員動向について審議した
10. 日本学術振興会育志賞について周知があった

【2024 年度臨時理事会】

日時：2024 年 8 月 4 日（日）18:00～19:50

出席者（五十音順・敬称略）

秋葉淳、岩崎えり奈、大川真由子、大塚修、小澤一郎、菊地達也、後藤絵美、
佐藤健太郎、福田義昭、保坂修司、堀抜功二、嶺崎寛子

欠席者

五十嵐大介、熊倉和歌子、錦田愛子、森本一夫、山口昭彦

〔報告事項〕

1. 学会のゆうちょ口座の住所・代表者変更について報告があった
2. アブダビ・アラビア語センターの代表団接受について報告があった
3. AJAMES の締切延長について報告があった

〔審議事項〕

1. 科研費申請（国際情報発信強化）について審議した
2. 日本学術振興会カイロ研究連絡センター長候補者について審議した

【2024 年度第 2 回理事会】

日時：2024 年 10 月 4 日（金）18:30～22:00

出席者（五十音順・敬称略）

秋葉淳、五十嵐大介、大川真由子、大塚修、岩崎えり奈、小澤一郎、菊地達也、熊倉和歌子、後藤絵美、佐藤健太郎、錦田愛子、福田義昭、保坂修司、嶺崎寛子、森本一夫、山口昭彦

欠席者

堀抜功二

〔報告事項〕

1. アブダビ・アラビア語センターの代表団との懇談会についての報告があった
2. 日本学術振興会に対して学振カイロ研究センター長 1 名を推薦したことについての報告があった
3. 第 30 回公開講演会についての報告があった
4. AFMA 開催準備の進捗状況について報告があった
5. 第 41 回年次大会の進捗状況について報告があった
6. AJAMES 編集について報告があった

〔審議事項〕

1. 学会のゆうちょ口座の住所登録の進捗報告があり、手続きについて審議した
2. 第 21 期評議員・理事選挙の選挙管理委員について報告があった
3. AJAMES41-1 号の投稿締切の延長について審議した
4. 南アジア学会との研究交流について審議した
5. 中東情勢への対応について審議した

【メール審議（2024 年 3 月 26 日～2024 年 10 月 4 日）

1. 2024 年 3 月 19 日 学生会員・会費特例会員からの会費徴収再開について
学生会員・会費特例会員からの会費徴収再開について、メールで稟議の結果、3 月 27 日に承認した
2. 2024 年 4 月 8 日 年次大会参加希望者に対する学会名義書類の発行の可否について、
メールでの稟議の結果、4 月 20 日に承認した
3. 2024 年 4 月 9 日 新入会員申請について
3 名から新入会員申請があり、メールで稟議の結果、4 月 17 日に申請者 3 名の入会を承認した
4. 2024 年 5 月 9 日 会費特例申請について
1 名から会費特例申請があり、メールで稟議の結果、5 月 29 日に申請内容を承認した
5. 2024 年 5 月 13 日 新入会員申請について
7 名から新入会員申請があり、メールで稟議の結果、5 月 29 日に申請者 7 名の入会を承認した
6. 2024 年 5 月 27 日 AJAMES 投稿締切延長について
AJAMES の投稿締切を 6 月 1 日から 7 月 1 日に延長することについて、メールでの稟議の結果、5 月 29 日に承認した
7. 2024 年 6 月 7 日 新入会員申請について
2 名から新入会員申請があり、メールで稟議の結果、6 月 17 日に申請者 2 名の入会を承認した
8. 2024 年 7 月 6 日～9 月 21 日 日本学術振興会カイロ研究連絡センター長について
日本学術振興会からの依頼を受け、推薦候補者について審議した
9. 2024 年 7 月 9 日 新入会員申請について
1 名からの新入会員申請があり、メールでの稟議の結果、7 月 18 日に申請者 1 名の入会を承認した
10. 2024 年 8 月 8 日 新入会員申請について
1 名からの新入会員申請があり、メールでの稟議の結果、8 月 16 日に申請者 1 名の入会を承認した

(熊倉和歌子 ニューズレター・書記担当理事)

2024 年度日本中東学会第 40 回年次大会総会議事録

日時：2024 年 5 月 11 日（土）17:00～17:50

会場：東京大学駒場 I キャンパス 18 号館ホール

（Zoom ミーティング併用によるハイフレックス形式）

出席：当日出席者 107 名、委任状提出 120 名、計 227 名

（会員総数 664 名に対する総会定足数 5 分の 1（133 名）を満たしたことにより、総会成立）

1. 開会宣言

2. 総会役員の選出

佐々木紳会員の司会により、議長として長沢栄治会員、書記として篠田知暁会員、辻大地会員、議事録署名人として永島育会員、水上遼会員が選出された。

3. 2023 年度事業報告および決算

下記の通り、2023 年度事業報告、AJAMES 編集委員会活動報告、2023 年度決算報告、監査報告が行われ、質疑応答を経て全会一致で承認された。

3.1. 2023 年度事業報告（小澤一郎 事務局長）

- 1) 第 39 回年次大会を 2023 年 5 月 13 日～14 日に筑波大学（ハイフレックス）において開催した。年次大会に韓国中東学会から Mijeong Hong 会長、Sanghyun Song 事務局長を招待した。
 - ・公開講演会「不確実な時代における中東研究の可能性：化石燃料、食薬資源、再生可能エネルギーの観点から」を開催。
 - ・研究発表 7 部会 43 本。企画セッション 1 本。
- 2) 日本中東学会年報（AJAMES）第 39 巻 1 号（2023 年 7 月）、第 39 巻 2 号（2024 年 1 月）の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。
 - ・海外研究機関ほか、国内外寄贈先への発送を行った。
 - ・科学技術振興機構（JST）運営の科学技術情報発信・流通総合システム（J-Stage）においてバックナンバーの公開（第 38 巻 2 号まで）を行った。
- 3) 第 29 回公開講演会「自伝が語る世界——近現代の中東・中央アジア」を、2023 年 11 月 12 日（日）に成蹊大学 6 号館 301 号室、および Zoom ウェビナー併用によるハイフレックス形式で開催した。
- 4) 2024 年 12 月に同志社大学で開催予定のアジア中東学会連合（AFMA）大会に向けて準備を進めた。
- 5) ニュースレター和文 4 回（総ページ数 87 ページ）。170 号（2023 年 4 月 28 日）、171 号（2023 年 9 月 15 日）、172 号（2024 年 1 月 8 日）、173 号（2024 年 3 月 28 日）。

- 6) 学会ウェブサイトの中東研究文献データベースの改修を行った。また、ウェブサイトの SSL サーバー証明書を取得した。
- 7) 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース 1989-2023」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。
- 8) 学会ウェブサイト、学会公式ツイッター (X)、および会員メーリングリストによる広報を行った。
- 9) 海外の関連学会との交流を促進した。
 - ・第 39 回年次大会で韓國中東学会 Mijeong Hong 会長にご挨拶をいただいた。
 - ・2023 年 11 月 14 日、韓国ソウル市のソウル歴史博物館にて、国立アジア文化殿堂 (Asia Culture Center: ACC) 主催の国際学術シンポジウム「西・南アジアの再発見：都市文化と生活様式」が開催され、本会から保坂修司会長と小澤事務局長が招聘を受け、参加した。保坂会長が祝辞を述べ、小澤事務局長が研究発表を行った。
- 10) 地域研究学会連絡協議会(JCASA)の参加組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図った。
- 11) 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会(GEAHSS)の参加組織として他団体と連絡を取りつつ、学術におけるジェンダー平等の促進を図った。
- 12) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行った。
- 13) 会員の増減：入会 36 名、退会 17 名の異動があった。結果、2024 年 3 月 31 日付の会員数は正会員 476 名（国内 466 名、海外 10 名）、学生会員 166 名（国内 162 名、海外 4 名）、会費特例会員 22 名（国内 22 名）となった。

3.2. AJAMES 編集委員会活動報告（福田義昭 AJAMES 担当理事）

- 1) 39-1 号の編集・刊行（2023 年 7 月刊行、7 月末～8 月初に発送）
 - (ア) 投稿総数：6（うち日本語 3 [書評論文 1 含む]、英語 2、アラビア語 1）
 - ① +英語博論要旨 1
 - (イ) 掲載原稿：3—論文 1（英語）、研究ノート 1（英語）、英語博論要旨 1
- 2) 39-2 号の編集・刊行（2024 年 1 月刊行・発送）
 - (ア) 投稿総数：6（うち日本語 5、英語 1）
 - (イ) 掲載原稿：2—論文 2（日本語）
 - 年間活動報告（英語）
 - (ウ) 「パレスチナ・ガザ情勢に関する日本中東学会理事会声明」（日本語・英語）
- 3) 科研費申請結果

令和 6（2024）年度科研費（研究成果公開促進費・国際情報発信強化（B））申請
 名称：『日本中東学会年報』（AJAMES）の国際的プレゼンス向上と国際情報発信力強化
 をめざす取組』

令和 10 年度までの 5 年間、金額 250 万円／年で応募（9 月）→ 不採択（3 月）
- 4) その他
 - ・原稿執筆要領・投稿規程等の改訂・公開

- ・ オープンアクセス：J-Stage によるバックナンバーの公開（38-2 号まで公開済）。
- ・ AJAMES ウェブサイトにて 36-1 号（2020）～39-2 号（2023）の目次を公開中。

3.3. 2023 年度決算報告（小澤一郎 事務局長）

◎ 総収入は 27,131,956 円、内訳は以下の通りであった。

- ・ 2022 年からの繰越金が 22,254,676 円、年会費収入が 4,519,038 円、その他収入（AJAMES 販売代金などを含む）が 358,242 円。

◎ 総支出は 27,131,956 円。これによって総収入額と一致。内訳は以下の通りのものであった。

- ・ 事務局費は 1,155,861 円、事業費が 4,935,456 円、2024 年度への繰越金が 21,040,639 円。
- ・ 年次大会時託児所特別基金、年次大会特別基金については例年通りに繰り入れを行った。
- ・ また、昨年度に引き続き、総会の決議を経て学生会員、会費特例会員の 2023 年度会費の免除を行った。

◎ 予算に比べ増減が著しい項目は以下の通りである。

- ・ 事務局費「アルバイト謝金」が予算額を大幅に下回っているのは、事務局での職務分掌の関係でアルバイトに依頼する業務が減少したためである。
- ・ 事務局費「資料保管費」が予算額を下回っているのは、2022 年度に実施された資料整理の費用を誤って計上していたためである。
- ・ 事業費「大会会場費」が 10 万円程度上回っているが、これには開催場所のつくば市からの助成金を充てた（大会開催費全体では約 15 万円の剰余金が発生）。

◎ 収入「錯誤振込」と支出「錯誤振込返金」の額が食い違っているのは、2021 年度・2022 年度に誤って振り込まれた年会費 20000 円の返金を 2023 年度に実施したからである。

◎ 年次大会時託児所特別基金からの大会託児所運営費の支出は、第 39 回大会についてはつくば市からの助成金をこれに充てたため、発生しなかった。

3.4. 監査報告（高尾賢一郎 監事）

2024 年 4 月 22 日に 2023 年度会計監査を行った結果、すべて適正に処理されたことを確認した。

【質疑応答】

（質問 1）AJAMES 投稿数の減少に対して、理事会としてどのような対応を検討しているか。

（回答：福田会員）後ほど活動計画報告の際にお話しする予定である。

（質問 2）繰越金が、全体総額の 5%弱にあたる 100 万円近く減額となっているが、これについて理事会はどのように判断しているか。

(回答：小澤会員) 減収については理事会でも検討を続けている。前年度まではコロナ禍の影響から学生会員および会費特例会員の年会費を免除していたが、今年度からは徴収が再開されるため、赤字幅は圧縮される見込みである。しかし減収傾向であることに変わりはないため、全体的な会の財政の構造自体を見直す必要も含め検討を続ける。

(質問3) 去年の資料の23年度予算案では利子が72円と記載されているが、今年度資料の予算において利子は65円と記載されているなど、若干の数字の齟齬がある。

(回答：小澤会員) 利子については数字のミス。ご指摘感謝する。

(質問4) アルバイト謝金について、国際文献社に事務を業務委託する前は100万円以上掛かっていたのが、委託後は80～90万円程度に抑えられている。それに伴い、事務局長一人に過度な負担がかかっているようなことはないか。また、もしそうした問題がないのであれば逆に、アルバイト謝金予算は今後50万円つける必要はあるのか。

(回答：小澤会員) 事務局の業務について、会計関係の振り込みや会計資料の作成などについては、望月葵会員にお願いしており、それ以外の事務は基本的に事務局長が担当しているが、過度に無理をしているということはない。そこでアルバイト謝金についても今年度は大幅に減額した計画を立てている。詳細は活動計画報告の際にお話しする予定である。

(質問5) 海外発送されている『日本中東学会年報』の冊子が、有効に活用されていないため、希望者に無償で払下げされる事例が聞かれる(例えばドイツのフライブルク大学)。これはいずれオンライン化されるため、積極的に冊子の形で所蔵する必要がないと考えられているからだと思われるが、こうした点を踏まえると、海外発送を止めて発送費用を削減することも検討してよいのではないか。

(回答：福田会員) こうした傾向は国内でも同様に聞かれる。しかしエンバーゴ期間が設定されており、一年間はオンラインでは利用不可であることを考えると冊子体も必要と考えられる。今回のフライブルク大学における報告を貴重な事例として捉え、将来的には冊子媒体を廃止することも含め検討を続ける。

(質問6) 「AJAMES 投稿数の減少に対する理事会の対処法」(質問1)の回答がオンラインでは聞こえなかった。

(回答：小澤会員) 「後ほど活動計画報告の際にお話しする予定である」と回答済み。

4. 学会活動にかかるアルバイト時給の引き上げについて

学会活動にかかるアルバイト時給について、2023年10月1日付での最低賃金改定により、従来の時給(学部生 1,100 円、大学院生 1,300 円、PD1,600 円)では学部生については法律違反となる可能性が生じた。そのため、2023年度第2回理事会(2023年11月2日開催)にて対応が審議され、今後は謝金時給を以下の通り設定することが決定されたと報告がなされた。

- ・最低賃金の最高額の下二桁を繰り上げた額を学部生の時給額とし、院生は学部生の時給額に 200 円を加算、PD は大学院生の時給額に 300 円を加算した額をそれぞれの時給額とする。
- ・このため、2024 年 5 月時点での最低賃金の最高額 1,113 円（東京都）に基づき、謝金時給は学部生 1200 円、院生 1400 円、PD1700 円となる。
- ・今後最低賃金が引き上げられた場合は、対応して謝金時給も引き上げる。

5. 2024 年度事業計画および予算

下記の通り、2024 年度事業計画、AJAMES 編集委員会活動計画、予算案が報告され、質疑応答を経て全会一致で承認された。

5.1. 2024 年度事業計画（小澤一郎 事務局長）

- 1) 第 40 回年次大会を 2024 年 5 月 11 日～12 日に東京大学駒場 I キャンパス（ハイフレックス）において開催する。年次大会に、韓国中東学会から Soonlei Gwag 会長、Kyungsoo Lee 事務局長を招待する。
- 2) 日本中東学会年報（AJAMES）第 40-1 号（2024 年 8 月）、第 40-2 号（2025 年 1 月）の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。また外国人編集委員の交代による審査・編集体制の強化、原稿執筆要領・内規・検討票の改訂、投稿規程の改訂などに取り組む。
- 3) 第 30 回公開講演会を 2024 年 11 月頃にオンライン・ハイフレックス・対面（オンライン配信なし）のいずれかの形式で開催する。
- 4) 2024 年 12 月 7 日～8 日に同志社大学今出川キャンパスでアジア中東学会連合(AFMA) 大会を開催する。韓国中東学会・中国中東学会・モンゴル中東学会からそれぞれ会長・事務局長を招聘する。
- 5) ニュースレターを年数回発行する。
- 6) 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース 1989-2024」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。
- 7) 学会ウェブサイト、学会公式ツイッター（X）、および会員メーリングリストによる広報を行う。
- 8) 研究不正・ハラスメントに関連する学会規則の制定を検討する。
- 9) 海外の関連学会との交流を促進する。
- 10) 地域研究学会連絡協議会(JCASA)の参加組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
- 11) 人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会(GEAHSS)の参加組織として他団体と連絡を取りつつ、学術におけるジェンダー平等の促進を図る。
- 12) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。
- 13) 第 21 期評議員・理事選挙を行う。

5.2. 2024 年度 AJAMES 編集委員会活動計画（福田義昭 AJAMES 担当理事）

1) 40-1 号の編集・刊行

投稿総数：6（うち日本語 1、英語 4、アラビア語 1）＋英語博論要旨 1

掲載原稿：3—研究ノート 2（英語 2）、英語博論要旨 1

現在編集作業中、2024 年 8 月発送予定

2) 40-2 号の編集・刊行

6 月 1 日に投稿締切、6 月 2 日から審査作業、2025 年 1 月刊行予定

3) 2024 年度編集体制

編集委員長：福田義昭（9） *括弧内の数字は「今年度で～年目」を示す

副編集委員長：錦田愛子（9）、菊地達也（4）

編集委員：石黒大岳（8）、佐々木紳（8）山崎和美（8）、吉岡明子（6）、
吉村武典（6）、江崎智絵（4）、柏木健一（4）、今井宏平（3）、竹村和朗（2）、
大川真由子（1）4 期 8 年委員を務めた齋藤剛氏に代わり大川真由子氏が委員就任。

外国人編集委員

ケイワン・アブドリ氏（神奈川大学／東洋研究所）、ムハンマド・ムーサー氏（Istanbul Sabahattin Zaim University）

打診中：レオン・ブスケンス氏（ライデン大学）

打診予定：バーキー・テズジャン氏（University of California, Davis）

退任予定：D. F. Eickelman（22?）、R. S. Humphreys（22?）、A. K. Rafeq（22?）、

Kim Joong-Kwan（12）、Song Kyung-Keun（12）→ 外国人編集委員は交代の準備中

4) 令和 7 年度（2025 年度）科研費研究成果公開促進費（国際情報発信強化）応募について検討

ただし電子化・オープンアクセス化などはすでに行われており、根本的に新しい取組を用意できなければ難しい

- 3 年間連続で不採択が続いており、今後の申請は理事会との議論を重ねる。
- 資金はあるが潤沢ではない現状、応募についても引き続き検討すると同時に、将来的にはデジタル化によって発送費を抑えるなどの方法もあり得る。

5) その他

・ J-Stage でのバックナンバーの公開作業（39-1 号以降）

・ 以下の各項目の検討：①「書評」「新刊紹介」の原稿依頼（献本活用）や会員間の意見交換欄等に関する制度整備、②投稿締切日の変更、③編集委員の任期に関する内規改正、④投稿規程における研究倫理に関する規定の整備、など。

・ 投稿申請票の改訂

- そもそも AJAMES に限らず中東・イスラーム関係論文の総数が減少傾向にある可能性（参考：錦田愛子会員による国際政治学会での報告）も指摘できる
媒体の多様化や、大学院生の減少などが理由として考えられる
- 投稿数を増やす具体的な改善策として「書評」「新刊紹介」をはじめとした原稿依頼も検討する

- 現状、あまり活用されていない献本の活用にもつながる
- 制度として会員間の意見交換等が可能な欄の設置も検討する
- 依頼原稿をストックしておいて、原稿が少ない号に掲載することも検討する
- 投稿数を増やす具体的な改善策として投稿締切日の変更も検討する
 - 年次大会で研究発表をしてフィードバックを得たものを、原稿化して投稿するのに、現状の6月1日締切では早すぎるとの指摘を受けてのこと
 - 若手への発表支援制度を使用して発表した成果は、できるだけ AJAMES に投稿するよう促す仕組み作りも検討する
 - 年次大会やアジア中東学会連合 (AFMA) 大会などでパネルとして発表した内容を特集号として掲載する仕組み作りも検討する

5.3. 2024 年度予算案（小澤一郎 事務局長）

◎総収入は26,976,304円を予定し、内訳は以下の通りになる。

- ・2023年度からの繰越金21,040,639円、年会費収入5,685,600円、その他の収入（AJAMES 販売代金を含む）250,065円。なお、2024年度から学生会員・会費特例会員からの会費徴収が再開される。
- ・その他の収入の科研費国際情報発信強化助成について、令和5年度は令和4年度に引き続き不採択となった。また、アジア中東学会連合（AFMA）大会の開催費に充当する科研費研究成果公開促進費も不採択となった。

◎総支出は26,976,304円。これによって総収入額と一致。内訳は以下の通りになる。

- ・事務局費1,370,000円、事業費8,505,000円、2025年度への繰越金17,101,304円。
- ・その他、年次大会託児所特別基金、年次大会特別基金について、それぞれ例年並みの予算を計上している。

◎前年度予算に比べて大きな増減のある項目は下記の通りである。

- ・国内の会議のオンライン化が継続するものと考え、理事会開催に必要な会議費や交通費、編集委員会旅費などは引き続き削減した。
- ・事業費「アルバイト謝金」は、今年度の実績に合わせて削減した。
- ・事業費「資料保管費」は毎月の倉庫使用料のみとなるため、昨年度実績に合わせて削減した。
- ・事業費「大会会場費」については、対面・Zoomミーティング併用のハイフレックス形式で開催するため、対面会場の2日分の会場費として200,000円を計上した。
- ・事業費「ウェブサイト改修費」「データベース改修費」は、昨年度で支出が完了したため、今年度は計上していない。
- ・事業費「国際交流費」について、2024年12月に開催予定のアジア中東学会連合（AFMA）大会の開催費に充当する科研費研究成果公開促進費が不採択となったため、例年並みの国際交流費400,000円に加え、開催費2,700,000円を計上した。
- ・事業費「選挙費用」は、第21期評議員・理事選挙に関する費用として300,000円を計上した。

【質疑応答】

(質問1) AJAMES 投稿数の減少に伴い、刊行を年2回から1回に変更することはあり得るか。

(回答：福田会員) 実際、過去にも年に1回の刊行となった時期もある。このまま投稿数の減少が続けば、やむなく年1回(合冊)の刊行となる可能性はある。しかし、年会費を徴収している限り年1回の刊行は死守する。

(質問2) 締め切りの話について検討があったが、投稿する側からすると、刊行の時期よりも早めに採択が決まると、実際に雑誌が刊行されるまで自分の書いたものが読んでもらえないということが起こり得るので、心理的ハードルが高い。締め切りを将来動かすことになった場合、海外の雑誌でよくあるようなオンラインファースト(採択が決まったら、雑誌刊行前に、会員限定でネット上に公開する)のシステムは考えられないか。

(回答：福田会員) 理事会でもプレプリントについては検討しており、需要がないと判断している。オンラインファーストサービスについては議題にあがったことはなく、システムの変更が必要なためいずれにせよすぐに導入することは難しいが、今後理事会での検討に含める。

(質問3) 投稿数の減少などについて、会員として他に改めて話すことができる場はあるか。また大会で行われた発表が、AJAMES に投稿されているのか。例えば『国際開発学会』では事務局が主導して、号ごとのテーマを学会で決め、大会でパネルとして発表したものを投稿することが基本となっている。このような流れを作ることも含め、現状なぜ本大会で発表された原稿が他の学会に流れるのか、例えば査読の厳しさなどその理由について、会員へのヒアリングなども必要なのではないか。

(回答：福田会員) 特定の場を設けることについて即答はできないが、投稿に関する意見や指摘などは、公開されているアドレスから編集委員にメールすることができる。依頼という形を現状取らない以上、どのようなかたちで、どこまで、学会発表の論文化を促すのかについては検討する必要がある。現状、大会で発表されたものが投稿される例が多いが、すべてではない。この理由として個人的には査読が厳しいということも考えているが、かといって、質の維持も鑑み査読を甘くするべきだとは考えていない。若手研究者に対しては特に、査読者は掲載に向けた建設的な修正意見をつけるなどの対応が必要だと考えている。

6. 日本中東学会会長挨拶

7. 議事終了・閉会宣言

議事会終了につき、司会の佐々木紳会員から閉会が宣言された。

2023年度決算
本会計

収入	23年度予算	23年度決算
2022年度よりの繰越金	22,254,676	22,254,676
年会費	5,406,700	4,519,038
正・学生会員	5,406,700	4,519,038
2020年度以前分	213,600	15,000
2021年度分	135,000	30,000
2022年度分	136,400	160,000
2023年度分	4,921,700	4,074,038
2024年度以降分	-	240,000
賛助会員	0	0
その他	250,065	358,242
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	0	0
利子	65	53
AJAMES販売代金	250,000	348,189
AJAMES掲載料	0	0
寄付	0	0
錯誤振込	0	10,000
雑収入	0	0
収入合計	27,911,441	27,131,956

(単位：円)

2024年度への繰越金内訳	21,040,639
郵便振替口座	18,537,400
三井住友銀行口座	2,469,092
科研口座	0
現金	34,147

(単位：円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2022年度よりの繰越金	603,079	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	5	
第39回大会託児所運営費		0
2024年度への繰越金		653,084
合計	653,084	653,084

(単位：円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2022年度よりの繰越金 (片倉もとこ研究奨励基金を含む)	1,703,812	
奨励金		200,000
振込手数料		440
利子	31	
2024年度への繰越金		1,503,403
合計	1,703,843	1,703,843

(単位：円)

支出	23年度予算	23年度決算
事務局費	1,800,000	1,155,861
アルバイト謝金	500,000	38,200
通信費	80,000	72,731
消耗品	50,000	6,971
会議費	0	0
交通費	0	1,600
振込手数料	20,000	12,870
事務局備品費	0	0
事務局移転費	50,000	8,496
事務外注費	900,000	867,227
資料保管費	200,000	117,766
会費返金	-	0
錯誤振込返金	-	30,000

事業費	6,455,000	4,935,456
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	350,000	465,130
AJAMES編集費	300,000	78,250
AJAMES欧文校閲費	150,000	94,376
AJAMES印刷製本費	1,950,000	1,260,490
編集委員会旅費	0	0
ウェブサイト改修費	400,000	386,600
データベース改修費	400,000	396,000
広報委員会事業費	900,000	904,420
国際発信強化旅費(海外招聘)	0	0
国際発信強化旅費(海外派遣)	0	0
国際交流費	400,000	235,081
AJAMES国内発送費	300,000	203,017
AJAMES海外発送費	100,000	55,970
選挙費用	0	0
J-Stage公開費	200,000	157,362
公開講演会開催費	300,000	43,760
中東・イスラーム文献DB更新費	150,000	150,000
地域研究学会連絡協議会分担金	0	0
人文社会科学系学協会男女 共同参画推進連絡会	5,000	5,000
年次大会特別基金への繰り 入れ	50,000	50,000
託児所特別基金への繰り入 れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	0

支出合計	8,255,000	6,091,317
繰越金	19,656,441	21,040,639
総計	27,911,441	27,131,956

(単位：円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2022年度よりの繰越金	1,171,059	
本会計よりの繰り入れ	50,000	
利子	10	
第39回年次大会剰余金	149,523	0
振込手数料		0
2024年度への繰越金	0	1,370,592
合計	1,370,592	1,370,592

(単位：円)

2024年度予算案
本会計

収入	23年度予算	24年度予算
2022年度よりの繰越金	22,254,676	
2023年度よりの繰越金		21,040,639
年会費	5,406,700	5,685,600
正・学生会員	5,406,700	5,685,600
2021年度以前分	348,600	11,700
2022年度分	136,400	48,000
2023年度分	4,921,700	324,900
2024年度分	-	5,301,000
賛助会員	0	0
その他	250,072	250,065
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	0	0
利子	72	65
AJAMES販売代金	250,000	250,000
AJAMES掲載料	0	0
寄付	0	0
収入合計	27,911,448	26,976,304

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額／納入予定額および納付率

年度	未納額(円)/納入 予定額(円)	前年度(2023年 度) 納付率
2020年度以前分	85,000	4%
2021年度分	130,000	10%
2022年度分	320,000	52%
2023年度分	570,000	88%
2024年度分	5,700,000	
合計	6,805,000	

上の表の見方は以下の通り

未納額:本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額

前年度納付率:予算策定年度の前年度決算(たとえば2023年度

予算であれば2022年度)における会費納付額÷

前年度予算に書かれている未納額×100

*2024年度予算に書かれている各年度(2021～2024年度)の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額(上記)に、その前年度分会費の2023年度における納付率(=2023年度決算における会費納付額÷2022年度予算に書かれている未納額)に5を足した値の1/100を掛けることによって算出している

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2023年度よりの繰越金	653,079	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	3	
第40回大会託児費用補助金		200,000
2024年度への繰越金		503,082
合計	703,082	703,082

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2023年度よりの繰越金(片倉もとこ研究奨励基金を含む)	1,703,812	
利子	18	
振込手数料		0
2024年度への繰越金		1,703,830
合計	1,703,830	1,703,830

(単位:円)

支出	23年度予算	24年度予算
事務局費	1,800,000	1,370,000
アルバイト謝金	500,000	200,000
通信費	80,000	80,000
消耗品費	50,000	50,000
会議費	0	0
交通費	0	0
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	0	0
事務局移転費	50,000	0
事務外注費	900,000	900,000
資料保管費	200,000	120,000
事業費	6,455,000	8,505,000
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	350,000	200,000
AJAMES編集費	300,000	300,000
同欧文校開費	150,000	150,000
同印刷製本費	1,950,000	1,950,000
編集委員会旅費	0	0
ウェブサイト改修費	400,000	0
データベース改修費	400,000	0
広報委員会事業費	900,000	900,000
国際発信強化旅費(海外招聘)	0	0
国際発信強化旅費(海外派遣)	0	0
国際交流費	400,000	3,100,000
AJAMES国内発送費	300,000	300,000
AJAMES海外発送費	100,000	100,000
選挙費用	0	300,000
J-Stage公開費	200,000	200,000
公開講演会開催費	300,000	300,000
中東・イスラーム文献DB更新費	150,000	150,000
地域研究学会連絡協議会分担当	0	0
人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会分担当	5,000	5,000
年次大会特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
託児所特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
前年度科研費残額返納	0	0
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	8,255,000	9,875,000
2023年度への繰越金	19,656,448	
2024年度への繰越金		17,101,304
総計	27,911,448	26,976,304

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2023年度よりの繰越金	1,370,587	
本会計よりの繰り入れ	50,000	
利子	8	
2024年度への繰越金		1,420,595
合計	1,420,595	1,420,595

(単位:円)

※なお、上掲の2024年度予算案には複数の誤りが含まれていました。詳しくは次項をご確認ください。

(小澤一郎 事務局長)

お詫びと訂正：年次総会資料の2024年度予算表について

2024年5月11日（土）に開催された2024年度日本中東学会第40回年次大会総会において配布した資料集のうち、2024年度予算表に以下の通り誤りがありました。

1. 「託児所特別基金」「学会奨励賞特別基金」「年次大会特別基金」の「2023年度よりの繰越金」が、2023年度決算での額と食い違っておりました。正しくは以下の通りとなります。

託児所特別基金 誤 653,079 円 → 正 653,084 円

学会奨励賞特別基金 誤 1,703,812 円 → 正 1,503,403 円

年次大会特別基金 誤 1,370,587 円 → 正 1,370,592 円

2023年度決算は実態（口座残高）を反映していて正しい金額ですが、2024年度予算表では誤った情報が入力されており、チェック不足でそのままになっておりました。

これに合わせて、「2025年度への繰越金」「合計」も以下の通り修正いたします。

託児所特別基金

2025年度への繰越金 誤 503,082 円 → 正 503,087 円

合計 誤 703,082 円 → 正 703,087 円

学会奨励特別基金

2025年度への繰越金 誤 1,703,830 円 → 正 1,503,421 円

合計 誤 1,703,830 円 → 正 1,503,421 円

年次大会特別基金

2025年度への繰越金 誤 1,420,595 円 → 正 1,420,600 円

合計 誤 1,420,595 円 → 正 1,420,600 円

2. 複数の項目の繰越金について、「2025年度」とあるべきところが「2024年度」となっておりました。

このたびは事務局の不手際により、会員の皆様には多大なご迷惑をおかけいたしました。謹んでお詫び申し上げます。なお、今回の修正は2024年度予算案のみで、2023年度決算および2024年度年次大会総会議事録の文言に影響を与えるものではありません。

(小澤一郎 事務局長)

(この後に訂正版の2024年度予算表が続きます)

2024年度予算案(訂正版)
本会計

収入	23年度予算	24年度予算
2022年度よりの繰越金	22,254,676	
2023年度よりの繰越金		21,040,639
年会費	5,406,700	5,685,600
正・学生会員	5,406,700	5,685,600
2021年度以前分	348,600	11,700
2022年度分	136,400	48,000
2023年度分	4,921,700	324,900
2024年度分	-	5,301,000
賛助会員	0	0
その他	250,072	250,065
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	0	0
利子	72	65
AJAMES販売代金	250,000	250,000
AJAMES掲載料	0	0
寄付	0	0
収入合計	27,911,448	26,976,304

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額／納入予定額および納付率

年度	未納額(円)/納入 予定額(円)	前年度(2023年 度) 納付率
2020年度以前分	80,000	4%
2021年度分	130,000	10%
2022年度分	320,000	52%
2023年度分	570,000	88%
2024年度分	5,700,000	
合計	6,800,000	

上の表の見方は以下の通り

未納額:本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額

前年度納付率:予算策定年度の前年度決算(たとえば2023年度

予算であれば2022年度)における会費納付額÷

前年度予算に書かれている未納額×100

*2024年度予算に書かれている各年度(2021~2024年度)の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額(上記)に、その前年度分会費の2023年度における納付率(=2023年度決算における会費納付額÷2022年度予算に書かれている未納額)に5を足した値の1/100を掛けることによって算出している

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2023年度よりの繰越金	653,084	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	3	
第40回大会託児費用補助金		200,000
2025年度への繰越金		503,087
合計	703,087	703,087

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2023年度よりの繰越金(片倉もとこ研究奨励基金を含む)	1,503,403	
利子	18	
2025年度への繰越金		1,503,421
合計	1,503,421	1,503,421

(単位:円)

支出	23年度予算	24年度予算
事務局費	1,800,000	1,370,000
アルバイト謝金	500,000	200,000
通信費	80,000	80,000
消耗品費	50,000	50,000
会議費	0	0
交通費	0	0
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	0	0
事務局移転費	50,000	0
事務外注費	900,000	900,000
資料保管費	200,000	120,000
事業費	6,455,000	8,505,000
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	350,000	200,000
AJAMES編集費	300,000	300,000
同欧文校閲費	150,000	150,000
同印刷製本費	1,950,000	1,950,000
編集委員会旅費	0	0
ウェブサイト改修費	400,000	0
データベース改修費	400,000	0
広報委員会事業費	900,000	900,000
国際発信強化旅費(海外招聘)	0	0
国際発信強化旅費(海外派遣)	0	0
国際交流費	400,000	3,100,000
AJAMES国内発送費	300,000	300,000
AJAMES海外発送費	100,000	100,000
選挙費用	0	300,000
J-Stage公開費	200,000	200,000
公開講演会開催費	300,000	300,000
中東・イスラーム文献DB更新費	150,000	150,000
地域研究会連絡協議会分担金	0	0
人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会分担金	5,000	5,000
年次大会特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
託児所特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
前年度科研費残額返納	0	0
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	8,255,000	9,875,000
2024年度への繰越金	19,656,448	
2025年度への繰越金		17,101,304
総計	27,911,448	26,976,304

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2023年度よりの繰越金	1,370,592	
本会計よりの繰り入れ	50,000	
利子	8	
2025年度への繰越金		1,420,600
合計	1,420,600	1,420,600

(単位:円)

日本中東学会第 40 回年次大会報告

◆プログラム◆

* 氏名の右側の () 内は所属。J は大学院生を指す。

第 1 日：2024 年 5 月 11 日 (土)

公開講演会 (東京大学駒場 I キャンパス 18 号館ホール)

日本中東学会総会 (同上)

懇親会 (生協食堂 2 階)

公開講演会「マイノリティが照らし出す中東世界」

全体司会：大塚 修 (東京大学／大会実行委員)

開会挨拶：保坂修司 (日本エネルギー経済研究所中東研究センター／日本中東学会会長)

開催校挨拶：寺田寅彦 (東京大学大学院総合文化研究科副研究科長)

報告：

宇田川彩 (東京理科大学) 「中東から広がるユダヤ世界：南米とのネットワークを中心に」

三村太郎 (東京大学) 「前近代における宗教的マイノリティー家と科学知：サービト・イブン・クッラとサービー家を中心に」

浜田華練 (東京大学) 「フィクションか、祈りか：中世アルメニア語文学におけるムスリムのキリスト教改宗」

質疑応答・全体討論

討論者：辻 明日香 (川村学園女子大学)、山口昭彦 (上智大学)

閉会挨拶：高橋英海 (東京大学／大会実行委員長)

第 2 日：2024 年 5 月 12 日 (日)

企画セッション、部会 (東京大学駒場 I キャンパス 5 号館)

【企画セッション】

セッション 1-1

Social Change in the Arab States of the Gulf: New Manifestations, Evolving Dynamics

Chair: Shuji Hosaka (JIME center IEEJ, President of JAMES)

Namie Tsujigami (Sophia University), “Adjusting and Adapting to Changes: Changed Lifestyles

of Saudi Women”

Sean Foley (Middle Tennessee State University), “Vision 2030 and the Saudi Film Industry”

Matthew Gray (Waseda University), “The Potential for Perfumery Research on the Arab Gulf States”

セッション 1-2

「スーフィー的なもの」を問う

司会：澤井 真（天理大学）

澤井 真（天理大学）「『スーフィー的なもの』とは何か」

近藤文哉（明治大学）「『スーフィー的なもの』の分析道具としての言説的伝統」

丸山大介（防衛大学校）「『スーフィー的なもの』はいかに構築されるのか？：スーフィズム・イスラーム主義・サラフィー主義の三者関係に着目して」

高橋 圭（東洋大学）「スーフィズムからイフサーンへ：アメリカのムスリム社会における『スーフィー的なもの』」

セッション 1-3

アラブ世界の非国家主体による疑似国家統治

司会：青山弘之（東京外国語大学）

青山弘之（東京外国語大学）「国家を志向しない統治主体：シリア北西部と北東部の統治の実態」

山岡陽輝（慶應義塾大学 J）「シリアにおける解放党の活動：非国家主体間の関係性を中心に」

小林 周（日本エネルギー経済研究所）「リビアにおける「非統治空間」の発生と非国家主体の活動」

セッション 1-4

デジタル化時代におけるオーラル文化の新発見とその形態：西アジア・イスラーム圏の共時的比較

司会：中村菜穂（大阪大学）

竹田敏之（立命館大学）「アラブ詩の伝統と革新：湾岸諸国におけるオーラル文化の再興」

千葉悠志（京都産業大学）「娯楽、政治、伝統文化：現代のアラビア語の詩番組での邂逅」

ダヌシュマン・イドリス（立命館大学）「宗教詩と音楽の融合：現代トルコにおけるイスラーム聖歌（ilâhî）の復興をめぐる一考察」

須永恵美子（東京外国語大学）「Zoom を利用した双方向型オンライン詩会の台頭と詩人・聴衆関係の変化」

コメンテーター：黒田彩加（京都大学）

セッション 2-1

イエメン内戦と中東地域秩序：「国際化した内戦」は何を変えたか

司会：大坪玲子（東京外国語大学）

吉田智聡（防衛省防衛研究所）「フーシー派の政治・軍事能力とその限界」

近藤重人（日本エネルギー経済研究所）「サウディアラビアの対イエメン政策の変化と展望」

佐藤佳奈（日本エネルギー経済研究所）「アラブ首長国連邦（UAE）のイエメン内戦への関与と思惑」

コメンテーター：千坂知世（名古屋商科大学）

セッション 2-2

アラビア語学習とアイデンティティ

司会：山本 薫（慶應義塾大学）

大隼エヴァ・ハッサン（慶應義塾大学）「複層的なアイデンティティ：アラビア語圏における『アラブ』認識」

ヌール・ムフリホ（慶應義塾大学 J）“Cultural Activities in Second Language Classrooms for Developing the Linguistic Competence”

山本 薫（慶應義塾大学）「在日アラブ人子弟を対象としたアラビア語教育の現状と展望」

コメンテーター：鷺見朗子（京都ノートルダム女子大学）

【個人研究発表】

第一部会

Noor J. E. Abushammalah (Kyushu University, J), “The Privileged Diaspora and their Struggle for Freedom from Without”

中西 萌（京都大学 J）「不確実性が生み出すシリア難民の経済的生存戦略：日本を事例として」

鈴木慶孝（日本学術振興会）「トルコの多文化共生の実現に向けた課題：移民・難民・マイノリティの包摂を焦点にして」

シェッターディ・アキル（慶應義塾大学）「モロッコ大震災被害に伴う居住地の復興と再建築の課題」＊オンライン発表（会場配信）

第二部会

藤本あずさ（京都大学 J）「個人型スーフィズムとスピリチュアリティ：トルコ都市部の若年層を対象として」

棚橋由賀里（京都大学）「15-16 世紀モロッコのスーフィーによる社会改革：タリーカ・ジャズーリーヤを中心に」

東長 靖（京都大学）「存在一性論の 7 次元説」

小野仁美（東京大学）「両性具有者をめぐるイスラーム法学説の形成：ハナフィー派とシャーフイー派の比較検討」

水谷 周（日本ムスリム協会）、前野直樹（日本ムスリム協会）「イスラームにおける直観」

第三部会

竹村和朗（高千穂大学）「エジプトの家族と刑法：婚姻の動産の不正浪費の罪に注目して」

田辺清鼓（京都大学 J）「持続可能な生活基盤を探る：トルコの乾燥農地における水資源管理と女性たちの親密なつながりに関する研究」

後藤絵美（東京外国語大学）「イスラームにおける男女平等論の展開：国際規範をめぐるムサーワーの思想と戦略」

鎌田由美子（慶應義塾大学）「イスラーム美術と近代日本：明治期以降の画家とコレクターをめぐって」

小島 宏（早稲田大学）「コロナ禍中の英国ムスリムの宗教行動変化と健康」

ソホラブ・アフマディヤーン（筑波大学 J）「在日クルド人ディアスポラにおける政治意識と団体活動」

第四部会

野中 葉（慶應義塾大学）「日本の若者世代のイスラーム教徒：『ヤングムスリム』とその活動に焦点をあてて」

堀抜功二（日本エネルギー経済研究所）「日本における『ドバイ』イメージの形成と流通」

Nicholas Mangialardi (Williams College), ““Nile Samurai”: Ragai Wanis and Egypt’s Global 1960s”

森 才人（早稲田大学 J）「城塞のなかの都市社会：オスマン朝支配初期カイロにおける軍人層の生活圏（1517–1538）」

澤 裕章（東京大学 J）「アラビア医学のペルシア語文化圏における受容と発展：『ホラズムシャーの貯蔵庫』にみる『医学典範』の薬学的影響」

倉野靖之（中央大学 J）「英国統治期パレスチナにおけるアラブ人の政治活動と英国の治安維持政策」

Nami Murata (Tokyo University of Foreign Studies, J), “Dress in National Uniform: the Ottoman Empire’s Adoption of the Wilsonian Principles”

第五部会

Alaa Elsharqawy (Cairo University, J), “Japan and the Egyptian/Israeli conflict until 1970”

渡邊文佳（早稲田大学 J）「『アラブの声』で語るモロッコ人活動家：1953–55 年のラジオ・カイロとモロッコ独立運動」

上山 一 (釧路公立大学)「イスラム銀行利用者の購買意思に影響を与える宗教性に関する実証研究：ヨルダンでの聞き取り調査から」

武石礼司 (東京国際大学)「中長期経済予測およびシナリオと中東・北アフリカ諸国の政策選択」

上野 祥 (創価大学)「スィーサー政権下エジプトの C 型肝炎撲滅政策」

小山 友 (千葉大学 J)「オランダの右派ポピュリズム政党『民主主義フォーラム』におけるムスリム有権者の政治的代表としての可能性の検討」

第六部会

松田和憲 (京都大学)「反過激主義と反テロのファトワー：『パキスタン・メッセージ』に着目して」

米田優作 (立命館大学 J)「現代エジプトにおけるサラフィー主義者のジハード観：ダアワ・サラフィーヤの生存戦略に着目して」

中村 寛 (神戸大学)「サウディアラビアの修正ワッハーブ主義への変容：全方位均衡論による説明」

阿部達也 (上智大学 J)「北クルディスタンにおけるマドラサ教育活動とクルド人の学問教育伝統」

松永泰行 (東京外国語大学)「スーフィー・タリーカとイスラーム覚醒・復興：ヘウラマーン／オウラマーナート (クルディスタン) の事例」

岡野内 正 (法政大学)「パレスチナ問題と中東および人類社会の未来：獄中のアブドゥッラー・オジャランのクルド問題解決見通しに照らして」

第七部会

松尾昌樹 (宇都宮大学)「政治的『石油の呪い』は中東に存在するか：地域間比較と時間に焦点をあてる分析手法の提案」

足立真理 (日本学術振興会)「インドネシアにおけるザカートに関する Twitter (現 X) 分析：オンライン空間での敬虔さに着目して」

酒井啓子 (千葉大学)「地域研究と国際関係論の融合を目指す：中東地域研究からの射程」

第八部会

村上武則 (東京外国語大学)「南部クルド諸語の現在とその位置付け」

榮谷温子 (慶應義塾大学)「クルアーンにおける修辭疑問文：特に hal 疑問文を中心として」

田中悠子 (日本学術振興会)「イスラーム初期における『論駁』関係の分析」

◆公開講演会報告◆

日本中東学会第40回年次大会の公開講演会は「マイノリティが照らし出す中東世界」と題して、宇田川彩・東京理科大学講師、三村太郎・東京大学准教授、浜田華練・東京大学准教授という3人の講演者による講演が行われた。宇田川報告「中東から広がるユダヤ世界：南米とのネットワークを中心に」では、ユダヤ人を語る際にアシュケナジ系がユダヤ文化を代表するものとして表象されてきた一方で、セファルディ系が過少に表象されてきたが、その理由は何かという問いを立て、その問いについて様々な角度からの考察がなされた。続く三村報告「前近代における宗教的マイノリティー家と科学知：サービト・イブン・クッラとサービー家を中心に」では、宗教的マイノリティであるサービア教徒のサービー家が、アッバース朝宮廷において、その科学知を利用しつつ、いかにして生き残り台頭していったのかについて、具体的な著作の分析を通じて詳述された。最後の浜田報告「フィクションか、祈りか：中世アルメニア語文学におけるムスリムのキリスト教改宗」では、アルメニア語文学におけるムスリムの改宗に関する物語が幾つか紹介され、それぞれの時代における宗教的事情、また、そこから読み取ることができる作者や読者の宗教的マイノリティとしての葛藤が活写された。

その後休憩を挟み、それぞれ中東地域におけるマイノリティを専門とする、辻明日香・川村学園女子大学教授（コプト教会史）、山口昭彦・上智大学教授（クルド史）という2人の討論者から、自らの専門に関連付けながら、3人の報告者に対するコメントと質問が出された。また、その中で、13世紀のコプト教会で制定された教会法がイスラーム法の強い影響を受けていたという事例が紹介されるなど、さらなる比較の材料が提示された。討論者から多くの質問が出されたため、その応答で時間が尽きてしまい、十分に議論する時間を取ることができなかったのが残念であったが、日本中東学会における研究の蓄積と幅広さを印象付ける講演会となった。今後の中東地域研究のあり方を考える上で重要な論点が幾つも提示されたこの公開講演会を受けて、今後中東地域研究がさらなる発展を遂げていくことを期待したい。

（大塚修）

◆研究発表会場から◆

企画セッション 1-1 「Social Change in the Arab States of the Gulf: New Manifestations, Evolving Dynamics」

The Arab states of the Gulf – Bahrain, Kuwait, Qatar, Oman, Saudi Arabia, and the United Arab Emirates (UAE) – are in a period of profound transition, driven by the need to diversify their economies, respond to changing international influences, and as new imperatives and opportunities emerge from disruptive technologies. This panel was motivated by the fact that there is considerable scholarly focus already paid to the political, economic and security dimensions of changes in the Arab Gulf states, but far less to the social and cultural changes that are taking place in the region, despite

their depth and importance. The panel therefore convened to delve into these dynamics, with three speakers – Prof. Namie Tsujigami from Sophia University, Prof. Sean Foley from Middle Tennessee State University in the US, and Prof. Matthew Gray from Waseda University – and with the session chaired by Prof. Shuji Hosaka, Director of JIME Center, IEEJ.

The session began with a short outline of its aims, with Prof. Tsujigami as the first speaker. Her presentation focused on the relationship between economic reforms, capitalism, and gender in Saudi Arabia, showing how this has led to changes in the roles of men and women as both consumers and entrepreneurs. Her speech drew on the Foucauldian theory of biopolitics as an explanatory framework for how power shapes and constrains the roles of women, supported by key case studies of Saudi female economic actors, as well as some observations on wider societal dynamics, gained from several fieldwork visits to the Kingdom over many years. The session then moved on to Prof. Foley, who examined the tremendous growth and potential of the Saudi film industry, especially in light of the *Saudi Vision 2030* strategy and the expansion of the state's support for film. This included an outline of some of the trends in Saudi film, as well as a deep dive into some of the ideas and complexities in the recent movie *Mandoub al-Layl* (“The Night Representative”), which presents a range of conflicting yet often equally valid characteristics of Riyadh and its people after dark. Finally, Prof. Gray looked into the state of current research on smell and perfume in the Arab Gulf states, arguing for the importance of the topic despite the paucity of research on it, and outlining how further research on the topic would enhance scholarship on the history, cultures, and political economies of the Gulf.

The session was well attended by some twenty people in total, and there was lively questions and discussion towards the end of the session. Attendees seemed especially interested in discussing further the nature, scope and limitations of female agency in Saudi Arabia, the possible political constraints on film-making and other artistic expression in Saudi Arabia and the Gulf, and how the study of smell could be linked to emerging research on the sociology of emotions and the sociopolitics of sound.

(GRAY Matthew)

企画セッション1-2「『スーフィー的なもの』を問う」

企画セッション1-2「『スーフィー的なもの』を問う」では、スーフィズムに対する視座の再考を試みるために、「スーフィー的なもの」(The Sufic)という概念を導入した研究発表を行い、この概念の有効性をフロアに問うことを試みた。

冒頭にパネル代表者の澤井真(天理大学)が「『スーフィー的なもの』とは何か」と題して、パネルの趣旨ならびに着想に到った経緯について、宗教学における「宗教」概念再考の流れと比較しながら説明した。研究者は「スーフィズム」概念を使用する一方で、その外縁に広がる意味を表す言葉が研究上でほとんど使用されてこなかった。こうした経緯から、「スーフィー的なもの」という語を使用し、現代スーフィズムを理解する視座を構築することを試みるパネルであると述べた。

近藤文哉会員（明治大学）の「『スーフィー的なもの』の分析道具としての言説的伝統」では、タラル・アサドの「言説的伝統」に言及しながら、「スーフィー的なもの」という視点を改めて位置付けるとともに、エジプトの預言者・聖者生誕祭（マウリド）に見られるスーフィー的なものについて考察した。マウリドで見られるアルーサ（花嫁人形）が、エジプトのイスラーム/スーフィズムの言説的伝統と関わり合いながら、スーフィー的とみなされていることを指摘した。

丸山大介会員（防衛大学校）の「『スーフィー的なもの』はいかに構築されるのか？：スーフィズム・イスラーム主義・サラフィー主義の三者関係に着目して」では、スーダンを事例に挙げながら、スーダンのバシル政権下におけるスーフィズムの動向が、イスラーム主義やサラフィー主義との関わりの中からは考察された。クルアーンやハディースを中心軸としつつ、イスラーム主義やサラフィー主義との差異化を意識しながら、スーフィーたちは、自らの言説——スーフィー的なもの——を再生産していることが指摘された。

高橋圭会員の「スーフィズムからイフサーンへ：アメリカのムスリム社会における『スーフィー的なもの』」では、アメリカ社会に生きるムスリムたちが、新伝統主義と呼ばれるスーフィズムの新たな動向から考察された。現代アメリカでは、スーフィズムを謳わない一方で、世俗的な価値観のなかにスーフィー的な意味を見出す動きがある。イスラームの伝統とアメリカの文化との両立を目指す方向性がスーフィー的なものとみなされることが指摘された。

3発表を受けて、澤井が総括を行った。そこでは、「スーフィー的なもの」と捉えられるべき現象は、イスラームとの関係性を再構成する動きであることが指摘された。また、スーフィー的なものという視座を導入することで、スーフィズム認識の変容を捉えることが可能となるゆえに、現代スーフィズムの複合性や混交性をより鮮明に描き出すことができるのではないかという問題提起がなされた。

質疑応答では、個別的な質問のほかに「スーフィー的なもの」の概念をめぐって肯定的な意見が示された。本パネルでの内容をより洗練させながら、スーフィズムを捉える一つの有効な視座としていくことが今後の課題であろう。

（澤井真）

企画セッション 1-3 「アラブ世界の非国家主体による疑似国家統治」

本企画セッションは、「アラブの春」に伴う紛争によって失敗国家に転落したシリアとリビアに焦点を当て、そこに生じた非統治空間（ungoverned spaces）において、非国家主体がどのような統治や活動を試みているのかを考察した。

冒頭に企画者の青山弘之会員（東京外国語大学）による基調報告が行われ、本企画セッションについての趣旨説明が行われ、これを受けて以下の3つの報告が行われた。

山岡陽輝会員（慶應義塾大学大学院（大学院生））の報告では、「カリフ制国家」の樹立を目指すイスラーム主義組織の解放党がシリア北西部の非統治空間における国際テロ組織のシャーム解放機構（旧シャームの民のヌスラ戦線）の統治のもとで展開している言動

への動態的な分析が行われた。

青山会員の報告では、シリアの非統治空間の現状が概観された後、北西部を支配するシャーム解放機構が、疑似国家としての統治形態を持ちつつも、国家建設を志向しようとしていない理由が解明された。

小林周会員（日本エネルギー経済研究所）の報告では、ムアンマル・カッザーフィー政権の崩壊後のリビアで生じた非統治空間における最有力の統治主体であるリビア国民軍（LNA）の実効支配の実態が論じられた。

セッションには、40人あまりの会員が出席し、報告後の質疑応答においては、シリア、リビア両国の政治の現状や今後の見通し、各報告において取り上げられた非国家主体の活動の詳細などについての質問や、非統治空間における非国家主体の統治の類型化の方途について提言やコメントが寄せられ、建設的な意見交換・議論が行われた。

（青山弘之）

企画セッション1-4「デジタル化時代におけるオーラル文化の新発現とその形態：西アジア・イスラーム圏の共時的比較」

本企画セッションでは、西アジアにおけるイスラームの基盤言語であるアラビア語、ウルドゥー語、トルコ語を対象に、詩を中心としたオーラル文化の現代的発展の特徴について考察し、その新しい社会的・文化的役割を明らかにすることを目指した。

中村菜穂会員（大阪大学）を司会に、以下4本の報告が行われた。まず、冒頭に企画者の竹田敏之会員（立命館大学）から企画の趣旨と課題の所在が述べられた。

竹田会員の報告では、湾岸アラブ地域における詩文化のトレンドについて、真珠採取に関する口語詩（ナフマ）のデジタルアーカイブ化、クウェートの詩人アブドゥルアズィーズ・バーブティーンによる「アラブ詩中央図書館」の設立、韻文要綱による文法教育の広がりなどが事例として紹介された。同地域では産油国の勃興に情報技術の発展とインターネットの普及の流れが加わり、詩の伝統やイスラーム古典の復興が勢いづいていることが示された。

千葉悠志会員（京都産業大学）の報告では、湾岸諸国における詩文化の再興について、特に衛星放送の普及とともに2000年代以降のアラビア語の詩の番組で見られるようになった変化を、メディアの役割と政治との関係に着目しながら検討がなされた。結果として、番組を通じたナショナリズムの強化・国威発揚という仕掛けが見て取れること、一方で、湾岸の場合、詩に代表される文化を政治的に用いるには難しさが伴うという現状が明らかにされた。

ダヌシュマン・イドリス会員（立命館大学）の報告では、現代トルコにおける「聖歌ブーム」を事例として、モスクだけでなく結婚式や子供向けの教育番組など、様々な場面やあらゆる階層に、音楽を伴う宗教詩（トルコ語で「イラーヒー」）が浸透している実態が動画データとともに示された。

須永恵美子会員（東京外国語大学）の報告では、ウルドゥー語の詩の朗誦会（ムシャーイラ）がバーチャルな空間に取り込まれたことによる、詩人と聴衆の関係性の変化につい

て検討が行われた。特にオンライン開催の普及による新たな変化として、1) 聴衆による評価の可視化、2) 経歴のみに依拠しない公平な評価、3) フィードバックというコミュニケーション空間の形成、という3点が指摘された。

コメンテーターの黒田彩加会員（京都大学）からは、詩人の育成に関する現況、詩の作り手と受容する側の関係（特にインターネット上での）、詩を審査する側および聴衆のリテラシーという問題が提起された。地域研究的アプローチからの詩文化をめぐる4報告は、特にアラビア文字を共有する西アジア・イスラーム圏の言語文化の未来を展望するうえで、研究上の新たな視座を提示するものであった。会場には多くの参加があり、今後の研究発展への期待も含め、強い関心が寄せられたセッションとなった。

（竹田敏之）

企画セッション 2-1 「イエメン内戦と中東地域秩序：『国際化した内戦』は何を変えたか」

本企画セッションは、10年目を迎えたイエメン内戦に関わる3つのアクターの視点（フーシー派、サウディアラビア、UAE）にとつての同内戦の意義や、同内戦における各アクターの行動が中東地域秩序に与えた影響を考察することを目指した。

冒頭に司会の大坪玲子会員（東京外国語大学）が、この紛争は「国際化した内戦（internationalized civil war）」と定義されることや、内戦の推移について概述した。

吉田智聡会員（防衛省防衛研究所）の報告では、1980年代のザイド派復興運動の萌芽に遡って、今日のフーシー派の勢力拡大までを整理した。フーシー派はサウディアラビアやUAEが資源をイエメンに投入せざるを得ない状況を長期化させるとともに、イランの紅海沿岸地域方面での活動拠点となっていると指摘した。さらに2023年10月以降のいわゆる「ガザ戦争」に際して、それまで内的志向が強かった同派が、米英やイスラエルといったアクターに対する争いを志向するようになったと分析した。

近藤重人会員（日本エネルギー経済研究所）の報告では、10年間でのサウディアラビアのイエメンに対する政策、特にフーシー派に対する姿勢の変化に関する報告が行われた。サウディアラビアの安全保障環境はフーシー派の攻撃「意図」の有無に依存しており、現状では同派との友好関係によってそれをなくすことに成功しているが、情勢次第では同派が再び同国を標的とする可能性は排除できないとの分析が提示された。

佐藤佳奈会員（日本エネルギー経済研究所）の報告では、UAEの対イエメン政策について、UAE独自の目的やそれに沿った独自の作戦が展開されてきた推移が報告された。さらに地経学の視点から、UAEがこれまで展開してきた経済活動を通じた自国の安全保障の実現という大原則は継続されているとの分析のうえで、イランを自国の経済圏に巻き込むことで、UAEの安全や安定がイランにとっての利益にもなる形が追求されていると結論付けられた。

コメンテーターの千坂知世会員（名古屋商科大学）からは、本報告会の内容を基にした学術研究への応用可能性や、各アクターに関する詳細部分についての質疑が行われた。学術研究分野では、本報告が時系列で3つのアクターの行動が変容していく動態が描出されたことから、対外政策決定論における対外政策の変更要因に関する研究への応用が期待さ

れよう。また一般に軍事戦略は転換の失敗が語られることが多いが、フーシー派が短期で軍事戦略の転換に成功した背景についても、分析する余地が残されている。各アクターを専門とする 3 名の報告者からの精緻な分析に加え、参加者からの活発な質疑応答が行われ、多方面への研究の発展可能性が大いに感じられた。

(吉田智聡)

企画セッション 2-2 「アラビア語教育とアイデンティティ」

本セッションではアラビア語を対象に、言語とアイデンティティをめぐる 3 つの発表が行われた。大隼エヴァ・ハッサン会員（慶應義塾大学）は「複層的なアイデンティティ：アラビア語圏における『アラブ』認識」と題して発表を行った。アラブという用語が時代や地域によって複数の意味で用いられてきたことを確認したのち、アラビア語圏出身者へのアンケート調査から、自分がアラブ人であると明確に意識しない人が相当数いることが報告された。アラビア語とアラブ人意識の関係については多くの先行研究があるが、現代の「アラブ人」と呼ばれる人々への意識調査というアプローチは興味深く、今後、より綿密な方法論に基づく調査と分析が求められる。

次に、ヌール・ムフリホ会員（慶應義塾大学院生）は「言語能力育成のための第二言語教室における文化活動」のタイトルで、英語による発表を行った。第二言語教育においては、文法や語彙などを覚えることと並んで、目標言語が話されている社会の文化を理解することが重要とする先行研究が多く存在する。この発表は、そうした先行研究の要点をまとめつつ、アラビア語教育における「文化」とは具体的にはどのような要素を指すのかを整理し、それを教室でどのように教えるべきかを提示した。各国の口語（アーンミーヤ）を「文化」のひとつとして教えるという提起が特に興味深かった。

企画者でもある山本薫会員（慶應義塾大学）は、「在日アラブ人の子どもたちを対象としたアラビア語教育の現状と展望」と題して、近年、急増する在日アラブ人の子どもたちに向けた母語・継承語教育についての調査結果を報告した。そうした場で実際にアラビア語を教えている教師と、子どものアラビア語教育に悩む親たちへの半構造化インタビューを踏まえ、日本の公教育や公空間の複言語化や複言語・複文化コミュニティの重要性などを提起した。また、大学でのアラビア語教育についても、多様な言語的・文化的背景を持つ子どもたちを包括できるような見直しや改善が必要であると提言した。

多くの会員が参加され、日本におけるアラビア語教育についての調査・研究をリードしてきたコメンテーターの鷲見朗子会員（京都ノートルダム女子大学）からの的確なコメント・質問によって活発な議論が展開された。

(山本薫)

第一部会

Noor J. E. Abushammalah（九州大学・院）会員は、湾岸アラブ諸国出身のいわゆる「亡命者」が「アラブの春」を契機に増加していることに着目し、亡命の理由・背景や、移住後の亡命者のネットワークを明らかにすることを試みる報告を行った。欧米諸国に移住し

た亡命者らは、多くの場合、非政府系組織の支援を受けている。彼らは亡命先で、どのように政治的・経済的安定性を維持するのか、出身国から受ける制裁はどのようなものかといった質問が寄せられた。

中西萌（京都大学・院）会員は、日本に居住するシリア難民に焦点をあて、不確実性と経済的生存戦略との連関を明らかにしようとした。報告では、移民と難民の分かれ難い境界についての議論から始まり、シリア難民が日本で生活を送るうえでの困難、そして彼らが日本に至るまでのしばしば多重な移住の経緯が、当事者への聞き取り調査に基づいて報告された。報告では、日本での居住年数を重ねるにつれて移住経験の捉え方に変化が生まれているという、示唆に富んだ指摘がみられた。

鈴木慶孝（日本学術振興会）会員は、多くの移民・難民を受け入れるトルコにおいて、実際にはテュルク系が優遇される政策が根強く残っていることを指摘し、トルコ政府が掲げる「多文化共生」を実現するためには、テュルク系優遇政策など見直さなければならない課題があるとする報告を行った。フロアからは、「多文化共生」には、政策レベル、草の根レベルがあることが指摘された。報告者からは、トルコでは政策レベルで多文化共生が追求されている旨の回答とともに、実際の優遇政策と並立しているための困難が指摘された。

（辻上奈美江）

シェッターディ・アキル（慶應義塾大学）会員は、2023年9月に発生したモロッコのアル・ハウズ地震の被害状況と復興に向けた課題について、現地調査の成果を交えたオンライン報告（会場配信）を行った。フロアからは地方山岳部における建築に関する伝統や担い手、人びとの意識などについても質問があり、現代的な建築と伝統的建築に対する現地の抱えるジレンマなどが明らかにされ、非常に興味深いものだった。

（野口舞子）

第二部会

藤本あずさ（京都大学・院）会員は、現代トルコの都市部の若者層に見られる新たなスーフィズムの潮流に西洋由来のスピリチュアリティの影響を見出し、都市部在住で高学歴化し社会進出した女性たちに関連づけた上で、この潮流を「個人型スーフィズム」と定義した。発表後には概念規定などについて活発な質疑と議論がおこなわれ、多様な視点とアプローチ法がありえる主題を扱っていることから、今後の発展が大いに期待される発表であった。

棚橋由賀里（京都大学・院）会員の発表は、15-16世紀モロッコのタリーカ・ジャズーリーヤを主題とし、後代の伝記資料ではなく同集団構成員の著作に依拠することで、ウラマー的スーフィーと非ウラマー的スーフィーの双方、民衆との関係などについて批判する者と批判される者の双方が同タリーカに属していたことを明らかにした。質疑では（非）ウラマー系という枠組み設定に関する疑問も提示されたが、問題設定や手法などの点で秀逸な発表であったのは確かである。

東長靖（京都大学）会員はイブン・アラビーに始まる存在一性論学派における存在の5次元説や40次元説を紹介した上で、ブルハーンプーリーを16世紀以降に南アジア・マレー世界に広まる7次元説の嚆矢と位置づけ、発表の後半ではそれ以外の地域への7次元説の波及（特に7次元説が主流となったマレー世界）について考察した。対象とする時代、地域、言語圏が極めて広範であり、スーフィズム研究の大家として面目躍如たる発表であった。

（菊地達也）

小野仁美会員（東京大学）による報告は、両性具有者を意味する言葉「フンサー」についての、イスラーム法形成初期（8～9世紀）の法学書における諸議論を分析するものであった。ハナフィー派の学祖の一人シャイバーニー（805没）の『アスル』とシャーフイー派の学祖シャーフイー（820没）の『ウンム』を主たる史料として分析した結果、フンサーに関する学説はシャイバーニーの存命中には確立していたことが明らかにされ、その後のこの言葉に関する議論の展開について展望が示された。

（大塚修）

水谷周（日本ムスリム協会）会員・前野直樹（日本ムスリム協会）会員の合同報告は、イスラームにおける直観の重要性と位置づけを信仰学の視点から再評価するものだった。まず水谷会員がクルアーンにおいて直観は啓示の一部としてとらえられていることを確認し、前野会員がムハンマド・アルブーティーの議論を通じて、とくに超常現象との関係について検討した。

（守田まどか）

第三部会

最初の報告者の竹村和朗（高千穂大学）会員は、エジプトの庶民の間に見られ、近年注目を集めている「アイマ」と呼ばれる花嫁の動産目録について、離婚時の裁判におけるその使われ方の具体例を挙げつつ、刑法と家族法の観点から自らの分析を報告した。非常に明快な報告であったが、会場からは、アイマに関して、夫の婚資としての性格を持つ事例が指摘され、その多様性や曖昧さについて議論がなされた。

続く田辺清鼓（京都大学（院））会員は、開発により変容するトルコ農村の女性に焦点を当て、トルコにおけるジェンダー・セクシュアリティの問題を、自らの現地調査の成果をもとに報告した。その内容は、従来の固定的な性分業の存在や構図を相対化し、新たな視座を提示しようとする意欲的なものであったが、まだ研究の方向性を探る中途段階の報告であり、質疑応答の中で、会場からいくつかの論点が生じた。

後藤絵美（東京外国語大学）会員の報告は、男女平等に関する「国際人権基準」とイスラームが対立するか否か、という議論を踏まえ、イスラーム世界におけるジェンダー平等運動を展開する団体として「ムサーワー」を取り上げ、その思想および運動の戦略を分析するものであった。報告後の質疑応答のやり取りを通じて、経済的基盤や運動の国際的広

がりなど、ムサーワーの実態に関するさらなる調査の必要性が明らかとなった。

(黛秋津)

鎌田由美子会員（慶應義塾大学）は、明治期以降の日本の芸術とイスラーム美術のかかわりについて報告した。会員の緻密な分析・調査により、日本におけるイスラーム美術品の蒐集の経緯と影響が具体的に明らかになった。特に初期のコレクター、細川護立の美術品の蒐集に着目し、彼が持ち帰った美術品が日本人の見識を広めることに寄与したことが提示された。報告後、日本で開催された展覧会のインパクトや、買値と売値の差についての活発な質疑応答がなされた。

小島宏会員（早稲田大学）は、コロナ禍において、18歳～39歳英国ムスリムの健康状態が、彼らの宗教行動の変化によりどのように変化したのかを、2021年11月に行ったウェブ調査データをもとに論じる報告を行った。小島会員は、一部の宗教関連要因の変化が、健康変化に対する影響を与える可能性があることを結論の一つとして言及した。この発表にたいして、英国のムスリムの内訳や、調査国の選定についての質問があった。

ソホラブ アフマディヤーン会員（筑波大学）の報告は、日本におけるクルド人社会内外の関係における遠距離ナショナリズムの効果と、クルド人と受け入れ社会との間で進行する多文化共生のプロセスにおける効果的な要素についてであった。本発表によれば、在日クルド人は祖国との強い結びつきを維持しており、彼らの活動が日本の多文化共生の課題に貢献している一方で、難民認定の問題は未だ残されたままである。質疑では、クルド人が日本を選択した理由、遠距離ナショナリズムと在留資格の関連、会員の研究の位置付けについて議論・助言がなされた。

(村山木乃実)

第四部会

野中葉（慶應義塾大学）会員は、日本で主に日本語で生活し、自らをしばしば「ヤングムスリム」と呼ぶ若者世代のムスリムの活動に焦点を当てる。これらの人々の活動には移民第一世代であるムスリムや外国人ムスリムの従来の活動とは一線を画し、独自のつながりやネットワークを形成する新たな潮流が見られることが示された。フロアからはこの新たな動きに対するコロナウイルスの影響、ソーシャルメディアなどの視点から活発な質問がなされた。

堀抜功二（日本エネルギー経済研究所）会員の報告は、日本における「ドバイ」の表象について歴史的・政策的変遷が出版や報道の資料を用いて分析するものであった。今日の日本の大衆が描くドバイイメージは、都市としての発展前の「出会い」から、砂漠の中の超近代都市としての表象の形成、さらに近年のその大衆化と、三つの時期に大別されることが明らかにされた。フロアからは、今後のほかの中東諸都市あるいはヨーロッパにおけるドバイ観との比較可能性や、ドバイ政府側の政策的変遷についての発展的な質問がなされた。

ニコラス・マンジャラーディ（ウィリアムズ・カレッジ）会員の報告では、1960年代に

日本に渡航し、日本文化に多大な影響を受けた芸術家ラギー・ワニースに着目し、個人史的でミクロな事例からエジプトと日本の関係性の文化的な＝「ソフトな」部分に焦点を当てたユニークな報告であった。フロアからはワニースの現地での日本人との関係性や、エジプトの置かれた当時の状況などに関する質問がなされ、今後の展開が楽しみな有意義な報告であった。

(保井啓志)

森才人会員の報告は、オスマン帝国による占領後のカイロにおけるカイロ城塞内の都市空間と社会生活を、ワクフ文書をもとに検討したもので、イエニチェリ軍団とアザブ軍団の棲み分けが必ずしもなされておらず、城塞内には商店や工房などが存在していたことを明らかにした。森報告には、城塞内のマムルーク時代からの変化や、城塞内外の人の行き来などについて質問があった。

澤裕之会員は、12世紀前半に書かれたペルシア語の医学書『ホラズムシャーの貯蔵庫』を、薬品としてのラクダの項目に着目し、イブン・シーナーの『医学典範』が与えた影響を論じた。フロアからは、ラクダ以外にキーとなる項目があるのか、『貯蔵庫』の写本がどれくらい読まれたのか、など様々な質問が寄せられた。

倉野靖之会員は、英国が委任統治領パレスチナに対する治安維持政策を英国文書から検討し、英国政府はアラブ人の政治的要求を過小評価し、警察の増員によって対処したことを跡付けた。倉野報告に対しては、英国の他の植民地での政策との関係やシオニスト側の主張の影響、「暴動」という用語などについて質問があり、最後の点については、英国文書中の用語であることが説明された。

村田七海会員の報告は英語でなされたもので、オスマン帝国の政府や知識人が、ウィルソンの掲げた民族自決主義を帝国の政治的独立を支持するものとして受け入れていたことを明らかにし、ナショナリズムがトルコ国民国家建設へと直接結びついていただけではないと論じた。フロアからは、マイノリティへの暴力とトルコ・ナショナリズムの関係や、オスマン政府がどれだけ多民族帝国を維持できると考えていたか、といった質問が出された。

会場には18名～35名ほどの参加者があり、歴史的テーマへの関心を窺わせた。

(秋葉淳)

第五部会

Alaa Elsharqawy 会員による報告は、外務省文書や日本の報道などを資料に、1950年代から60年代にかけてエジプトとイスラエルの紛争を日本がどのように見ていたかを論じた。外務省は早くもソ連のエジプト支援を非難しており、海運界の関心も高かった。会場からはパレスチナ難民に関する認識について質問があったが、第二次大戦直後ということもあり戦争が拡大しないかが主な関心だったという点が時代を反映していると感じた。

渡邊文佳会員による報告は、フランス統制下のモロッコの独立運動に向けたエジプト拠点のラジオ放送に着目した。国境を越えるメディアの影響という近年よく論じられるテー

マを先駆けする動きである。先発独立諸国を見て、独立後も植民地主義から自立することが重要であるとの訴えがあった点が興味深かった。様々な質疑応答があったなかで、フランスからの電波妨害だけでなく、共和政のエジプトから王制を前提とする声を上げる難しさがあったことなどが明かされた。

(鶴見太郎)

上山一（釧路公立大学）会員は、イスラム銀行利用者の購買行動について、ヨルダンの聞き取り調査に基づく統計分析の結果に基づき、宗教性が顧客態度を媒介として利用意図に対して間接的に影響を与えている点を指摘した。先行研究との関係性も踏まえた詳細且つ丁寧な統計解析が印象的であった。フロアからは宗教性の定義に関する確認の他、インドネシアにおける類似研究との比較を提案するコメントがあった。

武石礼司（東京国際大学）会員は、中東・北アフリカ諸国の政策選択について、各国の経済・財政・エネルギー関連のデータに基づく比較や COP28 の議論を整理した上で、各国の差異を踏まえた現実的な産業育成アプローチの重要性を指摘した。膨大なデータを分かりやすく分析し、提言に繋げている点が印象的であった。フロアからは地中海ガス田開発が与える影響や、原油生産大国サウジアラビアの脱炭素政策に関する質問があった。

上野祥（創価大学）会員は、エジプトのシースィー政権が進めた「C 型肝炎撲滅」対策の背景に、憲法改正の国民投票を見据えた動員効果を高める目的があったとの仮説を提示し、報道に基づく詳細且つ丁寧な分析に加え、更なる検証に向けた政策関係者等へのインタビュー調査の必要性も指摘した。フロアからは、マクロな枠組である「1 億人保健イニシアティブ」の文脈での検証や、ミクロな政権内部の関係性の検証を提案するコメントがあった。

小山友（千葉大学・院）会員は、オランダの右派ポピュリズム政党「民主主義フォーラム」に対するムスリム有権者による支持の背景に関し、投票行動や統計等に基づき網羅的且つ丁寧に分析し、対コロナ政策に対する支持に加え、移民であることの相対的はく奪感から生じる既成政治体制への不満があった可能性を指摘した。フロアからは、ジェンダー政策がムスリム有権者の投票行動に与える影響を更に検証することの有用性につき提案があった。

(柳沢崇文)

第六部会

第六部会の午前中には三名の報告が行われた。第一の報告は松田和憲会員（京都大学）による報告「反過激主義と反テロのファトワー：『パキスタン・メッセージ』に着目して」で、パキスタンにおける暴力的なテロリズムに反対する有力ウラマーのファトワー「パキスタン・メッセージ」（2018 年、2019 年第二版）の内容と背景を分析した。これはパキスタン・ターリバーンなど過激主義組織の活動に対し、パキスタン政府が主導して 1829 人のウラマーが署名した法学裁定である。署名に加わったウラマーにはパキスタンの主要なマドラサの諸潮流を代表する指導者が集まるなど評価できる点がある一方で、一部のウラ

マーの不参加や、ファトワーに関する広報が十分になされず一般市民や海外での認知度が低いという問題があることが議論された。

第二の報告は米田優作会員（立命館大学）による「現代エジプトにおけるサラフィー主義者のジハード観：ダアワ・サラフィーヤの生存戦略に着目して」で、イスラーム過激派ではないサラフィー主義団体であるダアワ・サラフィーヤの指導者著作に表れたジハード概念を分析することを通じて、同組織が自らを過激主義やムスリム同胞団と差異化し、他団体への批判を通じて正統性を高めてきたことを分析した。また、先行研究がサラフィー主義と暴力的ジハード主義を区別せず、両者を混同する認識を再生産してきた問題を指摘し、グループ間の思想的差異を考慮に入れた分析枠組みの再構成の必要を主張した。

第三の報告は 中村覚会員（神戸大学）による「サウディアラビアの修正ワッハーブ主義への変容：全方位均衡論による説明」で、近年のサウディアラビアにおける男女分離の緩和、音楽やダンス等への規制緩和などの文化・経済政策の急激な変容の背景に、宗教警察の権限を縮小し、ウラマーや旧世代の発言を押さえこみつつサウード家主導での変革を進めて行こうとする国王一族の意向が現れていると議論した。全方位均衡論の枠組みを利用してサウード家が近年の改革に見られる新しい価値規範を形成した背景と価値規範の内容を分析し、「修正ワッハーブ主義」が歴史言説の修正などの新しい展開を見せる一方で、宗教解釈が争点化することがない理由を論じた。

（渡邊祥子）

午後の第6部会においては、近現代におけるクルド系の社会、学問活動に関して、阿部会員、松永会員、岡野内会員の3名から報告があった。まず阿部達也会員（上智大学大学院博士課程）は、トルコ領北クルディスタンにおけるクルド系マドラサ教育組織、及びその運営実態に関して、現地調査の成果を踏まえた詳細な報告を行った。フロアからは、クルド系マドラサの教員及び学生のエスニックな構成に関する質問や、より広い政治、経済的な文脈にこれらのマドラサを位置付けた際の研究の意義を問うコメントが寄せられ、担当時間を最大限に生かして活発な意見交換がなされた。

次に松永泰行会員（東京外国語大学教授）は、イラン・イラク国境地域におけるクルド系スーフィー教団の社会活動、及びその近代史のなかでの変容に関して、教育組織、そこで働く教員らの人的なネットワークに着目して発表した。フロアからは、スーフィー教団の系統や導師及びマドラサ教師のキャリアパターンといった専門的な事項についての質問、さらには発表全体の議論の枠組に関するコメントなどが多く寄せられ、更なる研究の進展に向けて建設的な議論が交わされた。

最後に岡野内正会員（法政大学教授）は、現在進行中のイスラエルによるガザ侵攻を念頭にその解決に資する理論として、PKK 創設メンバーのアブドゥッラー・オジャランが提唱したクルド問題解決のためのロードマップを検討した。なかでも問題解決の鍵となる、エリートや国家に依拠しない全員参加型の民主主義に関して詳しい分析が行われ、フロアからもそこでのLGBTQの人々の処遇や、その実現のための自立的な経済体制の実現とい

った、オジャランが唱える民主主義の将来性について多くの質問が寄せられた。

(徳永佳晃)

第七部会

松尾昌樹(宇都宮大学) 会員の報告は、「石油の呪い」について、TSCS(横断時系列)データを用いた計量分析によって、従来の分析では考慮されていなかった中東地域の固有性、時間による変化を見出すものであった。「石油の呪い」研究の最新研究であるとともに定量的分析と地域研究の接続性を意識した意欲的な研究であったが、質疑応答でも方法論を横断した論点が挙げられており、フロアにも広く関心が共有されている様子が伺われた。

足立真理(日本学術振興会) 会員の報告は、インドネシアのムスリムのザカート支払いの誇示という主題について、Twitter(現 X)のデータを用いて分析を行うものであった。質疑応答では今日のインドネシア社会の特徴はもちろんのこと、Twitterのデータの分析、解釈方法、他のSNSとの比較など、様々な観点から白熱した議論が行われた。

酒井啓子(千葉大学) 会員の報告は、国際関係論、地域研究の融合という主題について、欧米とは異なる日本固有の展開を見出し、理論的フレームワークを提示しようとするものであった。中東地域研究を主眼としつつも、日本の地域研究全般に視座を広げた壮大な研究であったが、質疑応答では国際関係論自体の時代を通じた変化や社会科学を越えて人文学における状況にまで議論が及び、この主題の広がりが改めて確認されるものであった。

(渡邊駿)

第八部会

村上武則(東京外国語大学) 会員の発表は、クルド語全体における南部クルド諸語の分類上の問題点、南部クルド諸語として下位分類されている諸言語の多様性を示したのち、ソーラーニー方言やゴラーニー語などをとり上げながら、南部クルド諸語として分類されている現時点での研究上の実態や課題を探っていくものであった。会場からは、南部クルド諸語を混成言語として説明する手がかりや、歴史的観点からのペルシャ語の広がり方などについて質問がなされた。

榮谷温子(慶應義塾大学) 会員の報告は、アラビア語文法学における疑問文の定義を紹介したのち、クラーンにおけるhalや'aが用いられた修辭疑問文のさまざまな機能を分析するものであった。会場からは、関連性理論とのつながりや、疑問文の機能の分類基準についての質問が出た。クラーンでは、halよりも'aを用いた疑問文のほうが多いという報告を受けて、hal肯定疑問文のほうが多くなる現代正則アラビア語を含めた今後の研究の見通しなどについて質問があがった。

田中悠子(日本学術振興会) 会員は、宗教的他者をめぐるイスラーム初期史を描く試みとして論駁書に着目し、論駁を通じた自己/他者認識と、その発展過程をまとめた報告を行った。史料としてイブン・ナディームの『フィフリスト』を用いて、時代ごとに論駁者(著者)と分野を分類し、さらに論駁を通じた思想空間や内外のつながりの形成を見よう

とするものであった。会場からは、論駁相手となった二元論者がどのような対象なのか、また、時代区分の妥当性、反駁書と分派書との相違などについて質問があがった。

(濱田聖子)

◆第40回年次大会を終えて◆

1985年の第1回年次大会以来、40年ぶりに東京大学駒場キャンパスで開催された大会となりました。東京大学中東地域研究センターが実行委員会事務局を担当し、スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座のメンバーが業務を担いました。初日に教室設置の配信機材に故障が見つかるなど、肝を冷やす場面もありましたが、大過なく大会を終えることができたのは、ひとえに実行委員をはじめとする会員の皆さまのご協力の賜物です。とくに大会運営を支えてくださった15人の学生スタッフの活躍ぶりは、目を見張るものがありました。さる大河ドラマのタイトルを借りて、学生たちのなかに「スルタン殿の15人」を自称する向きもありましたが、誰一人欠けることなく大会を終え、安堵しています。大会後、私が万感の思いから「ご苦労様でした・・・！」と声をかけたのは言うまでもありません。

第40回年次大会では、さまざまな新しい取り組みが行われました。実行委員が部会の司会を担当すること、要旨の文字数を申込時と採択決定後の最終版で統一すること、合理的配慮の提供について明記することなどです。また、昼食のための休憩スペースの設置や礼拝ルームの提供、就学児遊戯ルームの開設、会員に広く要望を募るなど、前回大会やさまざまな学術会議の教訓を活かし、誰でも参加しやすい年次大会となるように心がけました。こうした取り組みが、将来の企画に向けて新たな糧となることを願っています。

今回、大会事務局を担当して気づかされたのは、若手会員の少なさです。大会には約220人の会員が登録しましたが、うち学生会員は報告者(15人)を含めて26人に留まりました。一方で非会員ながら大会に参加した学生がおよそ15人、さらに学生スタッフ15人をくわえると、50人以上の学生が会場にいたことになります。会場にあった活力を、学会へと引き入れていくための工夫が求められていると感じました。

もちろん、運営にあたっては、嬉しい発見も数多くありました。まずは、実行委員として参加いただいた会員の底力、みなぎる意欲です。せっかく大会を実施するのだから、いろいろ試してみようという意気込みには、中東学会の今後を明るく照らすヒントがいくつもありました。特に合理的配慮の提供に関する指針を委員会内部で共有できたことは、あたらしい取り組みとして特筆すべきものだったと思います。また、最終的に呼び名が「イエニチェリ」に落ち着くことになった学生スタッフらが、会員による真剣な研究報告や質疑応答に触れ、大いに刺激を受けていた点も印象的でした。会員が生き生きと交流し、健全に議論を交わす姿を見せることで、将来の世代が育っていくのだと気づかされる思いがしました。

鈴木啓之(大会実行委員会事務局長)

日本中東学会第40回年次大会決算

2024年6月12日時点

収入の部

大会開催費（学会本会計より）	400,000
大会参加費	252,000
（事前支払 247名）	247,000
（当日支払 5名）	5,000
懇親会費	601,000
（一般事前支払 108名）	540,000
（学生事前支払 16名）	48,000
（一般当日支払 2名）	10,000
（学生当日支払 1名）	3,000
会場費補助費（学会本会計より）	180,600
利息	0
収入合計	1,433,600

（単位：円）

支出の部

会場費（東京大学）	180,600
大会ポータルサイト作成費	179,000
学生アルバイト経費	300,200
（事前準備謝金 4名）	12,400
（学部生大会当日謝金 10名）	180,000
（大学院生大会当日謝金 5名）	105,000
（片付封入作業謝金 1名）	2,800
スタッフ大会当日昼食費	40,271
懇親会費	588,000
コーヒー代金	24,500
雑費	10,290
（ネームカードホルダー購入）	8,420
（郵送料・切手代）	1,870
振込手数料	1,155
支出合計	1,324,016
学会本会計への返金額	109,584

（単位：円）

第40回年次大会・託児所決算

収入の部

託児所運営委託費（学会本会計より）	36,975
介護タクシー・看護師派遣補助（学会本会計より）	42,820
収入合計	79,795

（単位：円）

支出の部

託児所運営委託費（1日）	36,975
介護タクシー・看護師派遣補助	42,820
支出合計	79,795
学会本会計への返金額	0

（単位：円）

アジア中東学会連合（AFMA）第 15 回大会のお知らせ

前号のニューズレターなどでご案内しておりますとおり、AFMA の第 15 回大会は、同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）との共催で、2024 年 12 月 7 日（土曜日）と 8 日（日曜日）に、同志社大学今出川校地で開催されます。7 日は午後に基調講演“Towards an Optimal Framework for Middle East Studies: Asian and Middle Eastern Perspectives in an Era of Global Challenges”を会場とオンライン配信のハイブリッドで行い、8 日は終日会場で個人研究発表、企画パネルおよび AFMA 参加学会の来賓による発表を行います。

ありがたいことに、個人研究発表 42 件と 12 の企画パネル、および 8 件の来賓による講演が、10 会場 15 部会に分かれて進行するという、大規模な国際学会となる予定です。それに相応しく、多くの方々に聞いていただき、質疑を盛り上げていただきたいと思いますので、会員の皆様のふるってのご参加をお願い申し上げます。また、今回の AFMA は、基調講演と研究発表・パネルともに、完全に公開としますので、会員以外の方々もご来聴いただけます。関心のありそうな学生・院生など、周囲に広くお声がけいただければ幸いです。

参加登録は、以下の URL もしくは QR コードから行ってください。期限は 12 月 1 日です。参加費は無料です。ただし、7 日夕刻の懇親会（Official Reception）に出席をご予定の場合には、11 月 15 日までに登録の上、フォーム内の指示に従って、懇親会費 7000 円をお支払いください。

託児所の開設も予定しております。詳細は追ってお知らせします。

Registration for Participation in
AFMA2024



https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=gMGpNSuYw0OD_N_OwcUPZKjAOe6ld7VClaTHtcfwNmFUQUFQnkvMSTA1Uk9FMFFOUE1NNEFOTzhLRy4u

以下のプログラムは、2024 年 10 月 1 日時点のものです。

Program

Day 1: December 7 (Sat), 2024

15:00–17:30 Keynote Speeches

Venue: Room 206 教室, Ryoshinkan (良心館) Bldg. and Zoom Platform

Theme: Towards an Optimal Framework for Middle East Studies: Asian and Middle Eastern Perspectives in an Era of Global Challenges

Speaker: Prof. Sajjad Rizvi (University of Exeter)

Speaker: Prof. SUECHIKA Kota (Ritsumeikan University)

Moderator: Prof. MORIMOTO Kazuo (The University of Tokyo)

18:00–20:00 Official Reception

Venue: French Restaurant Will, 7th floor, Kanbaikan (寒梅館) Bldg.

Day 2: December 8 (Sun)

Individual Presentations and Pre-organized Panels

Venues: Shiseikan (至誠館) Bldg. and Divinity Hall (神学館)

Room 1: S22 Shiseikan Bldg. (至誠館)

Session 1: Middle East and Asia 1 – Migration, Trade, and Cultural Exchanges

9:00–10:40 Changing Muslim Communities in East Asia

NISHIKAWA Kei (Ishinomaki Senshu University), “Comparing the Roll of Nahdatul Ulama in East Asia”

NARA Masashi (National Museum of Ethnology), “Changes in Taiwan’s Muslim Communities in Relation to the Middle East”

TAKAO Ken’ichiro (Middle East Institute of Japan), “Examining ‘Arabness’ among the Muslim Community in East Asia”

Commentator: UNNO Noriko (Osaka University)

Organizer: NISHIKAWA Kei

10:45–11:15 LEE Kyungsoo (Hankuk University of Foreign Studies), “Islamophobic Discourse and Fake News in Korea”

11:20–11:50 WANG Lincong (CAMES President), “Middle East Studies in China: Development and Characteristics”

11:50–13:30 Lunch Break

13:30–14:00 Lkhagvasuren Purev (MAMES President), “Current Situation on Khoton Ethnic Group of Mongolia: The Population Settlement and Level of Education”

14:05–14:35 KIM Eunji Maryam (Hankuk University of Foreign Studies), “The Right to Education and Social Adaptation for Arab Immigrant Youth in Korea”

14:40–15:10 AMANO Yu (Japan Society for the Promotion of Science/The University of Tokyo), “Baghdadi Jews and the East: The Case of “Israel's Messenger” (1904–1941) in Shanghai”

- 15:15–15:45 TSUNG Peichen (National Chengchi University), “Challenges and Strategies in Teaching Arabic Grammar in Taiwan: A Case Study at National Chengchi University”
- 15:45–16:00 Tea Break
- 16:00–17:40 Iran-Japan Economic Relations before the Islamic Revolution; Interplay of Business and Society
- YOSHIDA Yusuke (Setouchi Vocational College of Tourism), “The Emergence of a Consumer Society in Iran: A View from the Trends in the Export of Miscellaneous Goods from Japan to Iran in the 1960s”
- TSUBAKIHARA Atsuko (Ryukoku University), “The Making of Modern Life in Iran: Tracing Route and Meaning of Japanese Products”
- YAMAGISHI Tomoko (Meiji University), “Presence of the made-in-Japan in the Iranian magazines”
- Organizer: YAMAGISHI Tomoko

Room 2: S32 Shiseikan Bldg. (至誠館)

Session 2: Middle East and Asia 2 – Interregional Economics and Politics

- 9:00–11:00 East Asia-GCC Relations: Emerging New Relations of Cooperation and Competition under Geopolitical Change
- Steven M. Wright (Hamad bin Khalifa University), “Navigating Geopolitical Risks: The Impact of Regional Disorder on GCC-East Asia Relations”
- WANG Tingyi (Anwar Gargash Diplomatic Academy), “East Asian Economic Diplomacy towards the Gulf States”
- HORINUKI Koji (The Institute of Energy Economics), “East Asian Soft Power Competition in the GCC States”
- Discussant: SAITO Jun (Institute of Developing Economies-Japan External Trade Organization)
- Organizer: HORINUKI Koji
- 11:05–11:35 LEE Kwonhyung (Korea Institute for International Economic Policy), “How Can Korea and the GCC Upgrade Their Economic Cooperation in the Era of Energy Transition?”
- 11:40–12:10 Oyunsuren Samdandash (National University of Mongolia/MAMES Secretary General), “Implementation of Mongolia’s Foreign Policy in the Middle East (since 1990)”
- 12:10–13:30 Lunch Break
- 13:30–14:00 ZHU Quangang (CAMES Deputy Secretary General), “East Asia-GCC Relations in a New Era: Opportunities and Challenges”
- 14:05–14:35 SUN Degang (Fudan University/CAMES Vice President), “Peace Through Development: China’s Peace Initiative for the Middle Eastern Conflict Resolution”
- 14:40–15:10 NOH Dasol, SANG Hyunsong, PAIK Seunghoon (Dankook University), “A Study

of the Implications of the Middle East's Net Zero Strategies for Korea”

15:10–15:25 Tea Break

15:25–15:55 Elie Podeh (The Hebrew University of Jerusalem), “Israel and Indonesia: From Clandestine to Public Relations (1950–2024)?”

16:00–16:30 KIM Kangsuk, LEE Jisu (Hankuk University of Foreign Studies), “A Study on the Formation of Cordial Relations between Korea and Jordan during the Cold War”

Room 3: S33 Shiseikan Bldg. (至誠館)

Session 3: Social and Cultural Issues in the Middle East

9:30–10:00 SUMI Akiko (Kyoto Notre Dame University), “Muslim Women and Sports: Their Participation in International Sports Competitions and the Olympic Games”

10:05–10:35 SATO Marie (University of Tsukuba), Bayar Mustafa Sevdeen (University of Kurdistan Hewler), “Livelihood Diversity to Achieve a Sustainable Plural Society in the Ba'shiqa Sub-district of Northern Iraq”

10:40–11:10 Koo Giyeon (Seoul National University), ““Women, Life, Freedom”: The Role of Civil Disobedience and Global Solidarity in the Iranian Hijab Protests”

11:15–11:45 Murat TINAS (Turkish National Police Academy), “Enhancing Middle Eastern Studies through Interdisciplinary Undergraduate Programs”

11:50–13:30 Lunch Break

Session 4: “Heritage” in the Contemporary Middle East

13:30–14:00 YASUDA Shin (Takasaki City University of Economics), “Remaking the Islamic Middle East in the Globalized Era: Development of Global Islamic Heritage in Islamic Tourism Projects”

14:05–16:05 Heritage-making: A New Perspective for the Contemporary Middle Eastern Studies
TORIYAMA Junko (Ritsumeikan University), “From a Gender Norm to the Heritage: A Case of Moroccan Mom's Boy”

YASUI Hiroshi (Doshisha University), “Rebranding Tradition?: Environmental Sustainability as a Global Norm and the Adaptation of Israel's Kibbutz Agriculture”

OTSUBO Reiko (Tokyo University of Foreign Studies), “Creating Yemeni Authenticity in the Global Coffee Boom”

SAITO Tsuyoshi (Kobe University), “Reflections on Heritage-Making in a Contemporary Moroccan Context: The Case of Urban Redevelopment and a Traditional City Quarter in Rabat”

Organizer: TORIYAMA Junko

Room 4: S34 Shiseikan Bldg. (至誠館)

Session 5: Food Security in the Middle East

9:30–11:30 Revisited Food Insecurities and Vulnerable in the Middle East and North Africa: Three

Cases from Egypt, Lebanon, and Tunisia

IDO Yuko (Niigata University of International and Information Studies), “Multiple Crises and Resilience for Food Security in Lebanon”

TSUCHIYA Ichiki (Institute of Developing Economies–External Trade Organization), “Coping with Food Insecurities in Egypt”

IWASAKI Erina (Sophia University), “Structural Challenges to Food Security and Food Sovereignty in Tunisia”

YAMANAKA Tatsuya (Komazawa University), “Re-examining One Year of the Black Sea Grain Initiative and Its Impacts on the Middle East and North Africa”

Organizer: IDO Yuko

11:35–12:05 KIM Hyungyung (Hankuk University of Foreign Studies), “Upgraded Logistical Capability and Enhanced Food Security in the UAE”

12:05–13:30 Lunch Break

Session 6: Security and Conflicts in the Middle East

13:30–14:00 LIU Zhongmin (Shanghai International Studies University/CAMES Vice President), “The Transformation of the Regional System in the Middle East”

14:05–14:35 Hassan Geon (Hankuk University of Foreign Studies), “Realist Perspectives on the 2023 Israel-Hamas Conflict”

14:40–15:10 HWANG Yuihyun (Seoul National University), “Competing Victimhoods: Palestinian and Jewish Refugees in Israel’s Right-wing Media’s Narratives”

15:10–15:25 Tea Break

15:25–15:55 CHOI Dooyoung Wicks (Hankuk University of Foreign Studies), “Examining the Interconnection Between Somali Piracy and Terrorism: Implications for Regional Security”

16:00–16:30 KIM Seonwoo (Hankuk University of Foreign Studies), “Intensified Political Division Based on Tribalism and Prolonged Civil War in Libya”

Room 5: S21 Shiseikan Bldg. (至誠館)

Session 7: Politics and Regimes in the Middle East

9:00–11:00 Reconsidering Regime Security in the Middle Eastern Monarchies and Republics

KIKKAWA Takuro (Ritsumeikan Asia Pacific University) and WATANABE Shun (Kyoto University), “Rebuilding the Kingdom: Jordan in the 1990–1991 Gulf Crisis and Its Consequences”

TSUI Chinkuei (National Chung Hsing University), “China’s Belt and Road Initiative and Gulf Countries’ Foreign Policies”

YAMAO Dai (Kyushu University), “Electoral Violence and Struggle for Power: A List Experiment in Iraq”

SUECHIKA Kota (Ritsumeikan University), “Electoral Fraud and Sectarian Oligarchy in

Lebanon: Evidence from a Survey Experiment”

Organizer: SUECHIKA Kota

11:05–11:35 ZHANG Xueqing (University of Cambridge), “Language and Nationalism: A Case Study of Language Planning in Kurdistan Region of Iraq from 2005 to 2024”

11:40–12:10 AHN Soyeon (Seoul National University/KAMES Manager), “The Role of Civil Society in Political Development in the Middle East”

12:10–13:30 Lunch Break

13:30–14:00 TANG Zhichao (CAMES Vice President and Secretary General), “Middle East Strategic Pattern under the Framework of Great Power Competition”

14:05–14:35 NAMIUCHI Shiun (Tokyo University of Foreign Studies), “Quasi-State and Society Relationship in North-East Syria: DAARNES-NGOs Cooperation System”

14:40–15:10 YAMAOKA Haruki (Keio University), “Hizb ut-Tahrir’s Perceptions of Sects and Sectarianism”

15:10–15:25 Tea Break

15:25–17:05 New Frontier of Contemporary Egyptian Studies: Politics, Religion and Society

Sakura WELLS (Ritsumeikan University), “Exploring Civilization Discourse in Modern Egypt: Intellectuals and the Idea of a Civilized Nation”

Mohamed ETTAWY (Ritsumeikan University), “Egypt’s Regime Survival and Arab Gulf States’ Assistance: A Case Study of the Sisi-Saudi Relations During Turbulent Times 2013-2018”

YONEDA Yusaku (Ritsumeikan University), “Exploring Salafist Views on the Palestine Question: Egypt’s al-Da‘wa al-Salafiya and the ‘Gaza War’ after ‘October 7’”

Moderator & Commentator: YOKOTA Takayuki (Meiji University)

Organizer: YONEDA Yusaku

Room 6: S23 Shiseikan Bldg. (至誠館)

Session 8: Maghreb Studies

9:30–11:10 Navigating Central-Local Dynamics in the Maghreb: Challenges and Prospects

KIM Shinwoo (Institute of Developing Economies-External Trade Organization), “Higher Education and Regional Disparities in Tunisia”

TAKAHASHI Masahide (Middle East Institute of Japan), “Algeria’s Resource-Dependent Economy and Regional Disparities”

SHIRATANI Nozomi (Aichi Prefectural University), “Morocco’s Centralized Legacy and Regionalization Challenges”

Organizer: SHIRATANI Nozomi

11:15–11:45 HAN Saerom (Sookmyung Women’s University), “Why Do Tunisians Support a Strong Man?: Thinking beyond Democracy and Authoritarianism”

11:45–13:30 Lunch Break

Session 9: Turkish Studies

13:30–14:00 SUZUKI Yoshitaka (Japan Society for the Promotion of Science/Sophia University),
“A Study on the Multi-cultural Coexistence in the Republic of Turkey: From the
Perspective of Minority, Immigrants and Refugees Problems”

14:05–14:35 YANG Minji (Busan University of Foreign Studies), “The Turkish Refugee Crisis and
Its Implications for Korea: Towards an Inclusive and Sustainable Framework”

14:35–14:50 Tea Break

14:50–16:30 Frontiers in Turkish Studies: President Erdoğan’s 10 Years

IMAI Kohei (Institute of Developing Economies-External Trade Organization), “How Turkish
Citizens Evaluated the Neo-Ottomanism Diplomacy: Results of the Original Public
Opinion Survey in 2022”

IWASAKA Masamichi (Hokkai-Gakuen University), “Do the Military’s Economic Interests
Influence Political Intervention?: A Study Based on the Case of Turkey”

SEKI Lungta (Kobe University), “The Dynamics of Criticism and Response: Turkey’s
Diplomatic Sentiments Towards the EU”

Organizer: IMAI Kohei

Room 7: S24 Shiseikan (至誠館)

Session 10: Studies on the Contemporary Gulf and Red Sea Regions

10:05–10:35 KIM Joongkwan (Dongguk University), “Trade and Security Strategy amidst the
Geopolitical Dynamics of the Red Sea Crisis”

10:40–11:10 Omar Bortolazzi (The American University in Dubai), “Catalysts of Influence: Non-
Traditional Security, Economic Transition Strategies, and Public Diplomacy Initiatives
in the United Arab Emirates”

11:15–11:45 KANG Wongu (Hankuk University of Foreign Studies), “Qatar’s Attraction of Mega-
events and the Formation of National Identity”

11:45–13:30 Lunch Break

13:30–14:00 YU Hyeseon (Hankuk University of Foreign Studies), “Assessing Economic
Diversification in the UAE: A Text Mining and Time Series Analysis Approach
(tentative title)”

14:05–14:35 MURAKAMI Takuya (Ehime University), “The End of Dynastic Monarchy?:
Political Stability and Concentration of Power on Monarchs in the Gulf States”

Room 8: GB1 Divinity Hall (神学館)

Session 11: Christianity in the Middle East

9:30–11:30 Christianity as the Gateway Between the Middle East and East Africa: Its Rise and
Influence

TSUJI Asuka (Kawamura Gakuen Women's University), “The Spread of the Veneration of the

Virgin Mary from the Middle East to Ethiopia and the Agency of the Ethiopian Church”
TOBINAI Yuko (Morioka University), “From East Africa to North? : The Expansion of the East African Revival to Khartoum, Sudan”

MIYOKAWA Hiroko (Kyoto University), “Coptic Orthodox Mission in Africa: African Solidarity or Reproduction of North-South Problem?”

KUWAHARA Naoko (Iwate Prefectural University), “Managing Religious Diversity and Taming Religious Authorities”

Organizer: TSUJI Asuka

11:35–12:05 HA Hyun Jeong (Duke Kunshan University), “Living Sectarianism: The Experiences of Christian Minorities in Contemporary Egypt”

12:05–13:30 Lunch Break

Session 12: Modern History and Literature in the Middle East

13:30–14:00 KWANG Sungil (Korea University), “The Origin of Religious Zionism and Otsma Yehudit’s Far-right Ideology”

14:05–14:35 Motahare Mozafari (Busan University of Foreign Studies), “A Study of Contemporary Resistance Literature in Iran and the Arab World”

14:40–15:10 HAMANAKA Marina (The University of Tokyo), “Political Cartoon and Nationalism Changes in Representation in the Work of a Palestinian Cartoonist Nājī al-‘Alī: 1983–1987”

15:15–15:45 NAGASHIMA Iku (Japan Society for the Promotion of Science/The University of Tokyo), “Mapping the Ottoman Defense Strategy: Garrison Locations and Troop Numbers of Ottoman Battalions (1882–1912)”

Room 9: G32 Divinity Hall (神学館)

Session 13: Pre-modern History and Literature in the Middle East

9:30–10:00 CHIBA Yudai (Princeton Theological Seminary), “A ‘Nationalistic’ Script? Reexamining the Use of Palaeo-Hebrew in the Hasmonean Dynasty”

10:05–10:35 PARK Jeanam (Inha University), “The Great Pyramid of Khufu and Euclid’s *The Elements*”

10:40–11:10 LEE Heesoo (Hanyang University), “*Kushnameh* : The Medieval Persian Epics and Their Historical Context Relating to the Korean Peninsula”

11:15–11:45 JUNG Wootae (Hankuk University of Foreign Studies), “Open-door Policy of Abbasid Dynasty and Invigorated Intellectual Movement Surrounding the House of Wisdom”

11:45–13:30 Lunch Break

13:30–14:00 KIMURA Fuga (The University of Tokyo), “How Islamic Law of War “Developed” in the Mamluk Dynasty?: The Case of Ibn Jamā‘a”

14:05–15:45 Navigating Ambiguities and Complexities: Hadith Scholarship Facing Confessional

Boundaries

SU I-Wen (National Chengchi University), “Shu‘ba b. al-Ḥajjāj (d. 160/776) and Shī‘ism: His Sectarian Tendencies and Approach to Hadith Criticism”

MORIYAMA Teruaki (Doshisha University), “The Enemies of the Sunna within the Aṣḥāb al-Ḥadīth”

HIRANO Takahiro (University of Tsukuba), “The Concept of “Muwaththaq” in Shi‘i Hadith Studies”

Organizer: MORIMOTO Kazuo (The University of Tokyo)

Room 10: GB2 Divinity Hall (神学館)

Session 14: Frontier of Digital Humanities in Middle Eastern and Islamic Studies in Japan

10:45–11:45 Frontier of Digital Humanities in Middle Eastern and Islamic Studies in Japan

SUNAGA Emiko (Tokyo University of Foreign Studies), “Initiatives and Challenges for Public Access to Digital Archives in the Middle East and Islamic Countries”

KURODA Ayaka (Kyoto University), “Creating a Digital Space of Islamic Discourse by Egyptian Lay Preachers: The Preliminary Analysis of Their Media Strategy through the Introduction of the Arabic Text Mining Method”

TANAHASHI Yukari (Kyoto University), “Recent Situation of HTR for Arabic Manuscripts: How Can Humanities Researchers Contribute?”

Commentator: CHIBA Yushi (Kyoto Sangyo University)

Organizer: KURODA Ayaka

11:45–13:30 Lunch Break

Session 15: Human Mobilities in/from/to the Middle East

13:30–14:00 Mostafa Khalili (Kyoto University), “Oscillating Between National and Ethnic Identities: The Revival of Azerbaijani Ethnic Activism in Iran”

14:05–14:35 Hassen BOUBAKRI (University of Sousse), “Human Mobility in the MENA Region: Policies and Societies, or How the North African Countries Are Dealing with Transit Migration and EU Externalization Processes?”

14:40–15:10 KONDA Kano (Kobe University), “International Students as Initiators of Islamic Revival: A Case of the Islamic Society in Contemporary Manchester”

問合せ先

アジア中東学会連合 (AFMA) 第 15 回大会実行委員会

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

電話 : 075-251-3972

Email: afma2024@mail.doshisha.ac.jp

『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告

1. 今年度発行号について

40-1 号は本年 7 月末に刊行され、すでに皆様のお手元に届いているものと存じます。

40-2 号に関しては、来年 2 月頃の刊行を目指し、現在その投稿原稿審査および編集作業を進めています。

2. 来年度発行号について【締切延長のお知らせ】

本年 12 月の AFMA 開催（京都、同志社大学）等に鑑み、来年度第 1 号の投稿締切を以下のとおり 5 週間ほど延長いたします。

【41-1 号】延長後の投稿締切：2025 年 1 月 8 日（水）

AJAMES には論文・研究ノート・書評論文・資料紹介・研究動向・書評・博士論文要旨（英語）など、さまざまなジャンルがあります。みなさまの多様な研究成果をぜひ御投稿ください。欧文投稿も大歓迎です。

また例年どおり、欧文特集企画も募集しております。企画をお持ちの方は、直接御投稿いただくか、編集長まで御相談ください。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、投稿規程・原稿執筆要領の最新版は、AJAMES 最新号のほか、学会サイトにも掲載されておりますので、投稿前にそれらを御確認ください。投稿された原稿が執筆要領に当たっていない場合、修正・再提出をお願いすることがありますので、この点とくに御留意ください。

3. 博士論文要旨（英語）について

AJAMES では、会員による中東関連の博士論文要旨（英文）を掲載しています。最近博士論文を提出された会員の方は、ぜひ御投稿ください。

4. AJAMES のバックナンバーは、科学技術振興機構の電子ジャーナルの無料公開システム J-Stage 上で公開しています。刊行後、1 年を経た論文はこちらで閲覧できますので、御活用ください。<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ajames/-char/ja>

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒562-8678 大阪府箕面市船場東 3-5-10

大阪大学 箕面キャンパス 外国学研究講義棟 841 号室 福田義昭研究室気付

『日本中東学会年報』編集委員会

E-mail: ajames-editor@james1985.org

（福田義昭 AJAMES 編集委員長）

寄贈図書

【単行本】

大稔哲也編『「アラブの春」のアクチュアリティ——エジプト一月二十五日革命を中心に
見るグローバリゼーション下の日常的抵抗』山川出版社、2024年。

カースィム・アミン、岡崎弘樹・後藤絵美訳『アラブの女性解放論』法政大学出版
局、2024年。

鈴木啓之、児玉恵美編『パレスチナ／イスラエルの〈いま〉を知るための24章』明石書
店、2024年。

田中逸平『曾遊畫觀』東洋大学アジア文化研究所、2021年

B. ファン・バヴェル著、友部謙一・加藤博・大月康弘・田口英明訳『市場経済の世界史
——見えざる手をこえて』名古屋大学出版会、2024年

スワード・アルムダファーラ『アラブに日本の教育を』日本サウディアラビア協会、
2024年

山本沙希『すべての指に技法を持つ——手仕事で織りなす現代アルジェリア女性の生活
誌』春風社、2024年

依田純和『マルタ語』（世界の言語シリーズ19）大阪大学出版会、2024年

『2023年度 大学研究助成 アジア歴史研究報告書』公益財団法人JFE21世紀財団、
2024年。

ANDO Junichiro, OMOSO Chisako, and MISAWA Nobuo, eds. *The Illustrated History of the
Modern Japanese Images about the Islamic World through the Expositions*, Tokyo: Asian
Cultures Research Institute, TOYO University, 2021.

Bowles, Charles and Susan M., YAMAGUCHI Takumi, ed., *A Nile Voyage of Recovery* (First
Edition), Tokyo: Asian Cultures Research Institute, TOYO University, 2024.

MISAWA Nobuo, ed., *Tokyo Muslim School Album (1927-1937)*, Tokyo: Asian Cultures Research
Institute, TOYO University, 2021.

MISAWA Nobuo, ed., *Modern Japanese Images about Turkey: Proceedings of the International
Symposium “the Formation of the Relationship between Modern Japan and the Islamic
World” Organized on December 9-10, 2023, at TOYO University (1)*, Tokyo: Asian
Cultures Research Institute, TOYO University, 2024.

MISAWA Nobuo, ed., *The Archive of the Source Materials about Greater Japan Muslim League
(1): Proceedings of the International Symposium “the Formation of the Relationship
between Modern Japan and the Islamic World” Organized on December 9-10, 2023, at
TOYO University (2)*, Tokyo: Asian Cultures Research Institute, TOYO University, 2024.

MISAWA Nobuo, ed., *The Archive of the Source Materials about Greater Japan Muslim League
(2): Proceedings of the International Symposium “the Formation of the Relationship
between Modern Japan and the Islamic World” Organized on December 9-10, 2023, at
TOYO University (3)*, Tokyo: Asian Cultures Research Institute, TOYO University, 2024.

【逐次刊行物・ジャーナル・その他】

『季刊アラブ』No. 187、日本アラブ協会、2024 年 4 月

『季刊アラブ』No. 188、日本アラブ協会、2024 年 7 月

『大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立民族学博物館 要覧 2024』国立民族学博物館、2024 年 7 月

(小澤一郎 事務局長)

会員の異動

【新入会員】

池上 羽乃

斉藤 美海

鈴鹿 光次

園田 洋介

高田 葉月

田澤 セバスチャーノ茂

近田 佳乃

東 佑太

法島 香月

堀尾 藍

前野 直樹

和田野 滯

ハムザ イサム

Altaweel Rawia

【所属先変更】

赤川 尚平

慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート

上野 愛実

岩手県立大学

黒田 彩加

京都大学

後藤 真実

秋田大学

須永 恵美子

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

徳永 佳晃

日本学術振興会特別研究員 PD (日本大学)

中村 菜穂

大阪大学大学院

中村 友紀

日本工営株式会社

ブデルアジーズアフマド・ヘバ

東京外国語大学

タッラー・オマル

溝渕 正季
三代川 寛子
望月 葵

明治学院大学
京都大学
公立小松大学

(小澤一郎 事務局長)

連絡先をご存じないですか

下記の会員の方々は、連絡先が不明なため、学会からのお知らせなどをお届けすることができないでおります。連絡先をご存じの方は、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご面倒でもご本人にお伝えいただければ幸いです。

イブラヒム・ワリード・ファルーク	岡部 友樹	北川 明	黒宮 貴義
後藤 信介	住吉 大樹	高安 海翔	ターリク フセイン ハカミー
築地 孝治	ナスル・ゴラムレザ	ババアリ 梓晴	林田 花枝
平川 大地	ファトヒー モハンマド	藤井 菜津子	藤本 あずさ
三尾 真琴	三橋 咲歩	ヤズィード ナーセル	
横田 吉昭	Abuhajir Rehab A.	Abhu-Hajiar Iyas Salim	HOSNIEH Elham
Layla Saleh	Mohamad Haidar Reda	Teeba M. Mohammed Abdulati	

(小澤一郎 事務局長)

事務局より

長かった夏もとうとう終わりにさしかかり、殺人的な暑さの続いてきた京都もようやく涼しくなり始めています。この間、5月11日・12日には第40回大会が東京大学駒場キャンパスで開催されました。事務局側では、今号でお知らせした通り総会資料での誤りを見過ごすという痛恨のミスがありましたが、大会そのものは大過なく終了したかと思えます。開催校である東京大学と実行委員をはじめとする関係者の皆様にはこの場を借りて改めて御礼申し上げます。

(小澤一郎 事務局長)

日本中東学会ニューズレター 第174号

発行日 2024年10月7日

発行所 日本中東学会事務局

日本中東学会事務局

〒603-8577

京都府京都市北区等持院北町56-1

立命館大学文学部 小澤一郎研究室内

E-mail: james@james1985.org

<https://www.james1985.org/>

郵便振替口座：00140-0-161096

(日本中東学会)

ゆうちょ銀行口座：〇一九店(当) 0161096

(ニホンチュウトウガッカイ)